



古民家を修復した別荘の庭。北アルプスの眺望を借景とするため、主にコナラを少なめに植栽した。
正面奥には故小形研三先生蔵であった古代五輪塔を配した。 2023.2.22 筆者撮影

技を教え育てる



1953年生まれ、東京都出身。1976年〜1990年、東京庭苑株式会社在籍、小形研三先生に師事。1994年、長野県南安曇郡三郷村(現安曇野市)へ移住。「福永庭苑」として個人住宅の庭園設計・施工の傍ら文化財庭園(小石川後楽園内庭・高橋是清邸・永保寺庭園・栖雲寺庭園、根来寺聖天池、盛美園庭園)の修復工事設計監理業務に従事する。座右の銘:「Simple is best」、誠意。

福永 邦昭
ふくなが くにあき

『住まいの庭は、まず美しく、見る人の心をなごやかにさせるような空間でありたい。あまり理屈っぽかったり、表現過剰であったり、見る人を考え込ませるようなタイプの庭は少なくとも住まいの庭としてさけるべきではなからうか』

これは私が師事した小形研三先生の言葉です。この理念を基に造園の設計から施工に関して細かな事柄まで教えていただきました。

具体的に一例を紹介すると、庭づくりは杭や素縄、垂木を使って池や流れなど構造物の位置、形状を形取って並べあられる場所から眺め確認してから作業を始めます。流れや池の景石を据え植栽になると、庭の主となる雑木はもちろん背景となる常緑樹に始まり、それに添える灌木の位置や向き、立て入れの留意点など。さらに根締めとなる地被植物の配置、コケの貼り方に至るまで指示を受けました。植木をその場に持つて行き、次の指示を待つと「てんとに廻せ」とか「チョイあべに廻せ」などと細かい指示で庭づくりが進められました。これを繰り返して、小形さん(本人は先生と呼ばれるのを嫌い、社員は皆こう呼んでいました)はどう植えるか予想して構えていると「よからう」と声が掛かり、しばし優越感を覚えました。

設計に関しても現場が雨休みになると皆を集め、敷地と建物、周辺環境条件を設定した課題を出し、平面図やパースの書き方、模型を使つての作庭指導をされました。私をはじめ一つの小庭の設計を担当させてもらったときのこと。考えたプランの下図を持つて行くと「駐車場へ行つて原寸で書いて見ろ」と言われ、チョークで書いてみると、縮小図面と原寸大の感覚の差は歴然でした。それはまだ図面に慣れていない私に対してスケールアウトをしないような感覚を身につけさせるための教えでした。また、小形さんは雑木を植えれば直ちにそのまま自然写景の庭になるわけではない、庭全体のバランスや抑揚を付けることの重要性を強調しました。

独立して30余年が経ち、多少の庭をつくらせてもらうことができました。どれ程の『心をなごませる庭』ができたかわかりませんが、これからも師を追いかけて行きたいと思っています。

(正会員)

一般社団法人日本庭園協会は、2023（令和5）年3月10日（金）午後1時より東京・江東区の清澄庭園・大正記念館において定期総会を開催した。

【全国評議員会】 午前10時30分

司会Ⅱ小沼康子広報委員長
評議員69名中、出席27名、委任状31名、計58名で成立。内田均副会長の開会の辞。高橋康夫会長挨拶の後、会長が議長席に着き、議事録作成者に加藤精一常務理事、議事録署名人に平井孝幸理事、北村均理事を指名、議事に入る。議案について議論が交わされ、総会において一括審議を諮ること可決。

【総会】 午後1時

司会Ⅱ小沼広報委員長
総会員517名中、出席55名、委任状240名、計295名で定款第19条により成立。内田副会長の開会の辞。高橋会長の挨拶に続き、議長席に着き、議事録作成者に加藤（精）常務理事、議事録署名人に上野周三理事、平井理事を指名し、議事に入る。

○第一号議案「令和4年度事業報告の件」

現況報告Ⅱ加藤精一総務委員長
本部事業報告Ⅱ加藤総務委員長／

廣瀬慶寛技術委員長／

小沼広報委員長／

曾根将郎国際活動委員長

支部事業報告Ⅱ廣瀬技術委員長／

各支部長

1 現況（令和4年12月31日現在）

(1)事務所：〒169・0051

東京都新宿区西早稲田1・6・3

フェリオ西早稲田301号

電話：03（3204）0595

E-mail gsj20@m7.dion.ne.jp

URL <https://niteikyuu.org/>

(2)会員数（カッコ内の数字は前年比）

正会員493名（28減）

特別会員／名誉会長・会員12名（1減）

維持会員10社（増減無し）

学生会員2名（増減無し）

総会員数517名（29減）

(3)本部委員会及び支部組織（カッコ内は委員長）

①本部委員会／総務委員会（加藤精一）／財務委員会（加藤新一郎）／技術委員会（廣瀬慶寛）／鑑賞研究委員

会（菊地正樹）／広報委員会（小沼康子）／国際活動委員会（曾根将郎）

②特別委員会／文化財指定庭園調査委員会（高橋康夫）／日本庭園協会賞選考委員会（高橋康夫）／日本庭園協会賞選考規程検討委員会（高橋良仁）／日本庭園協会設立百周年記念事業委員会（高橋康夫）

③支部（カッコ内は支部長）

北海道南支部（桃井雅彦）／宮城県支部（竹田利光）／栃木県支部（清水一樹）／茨城県支部（飛田幸男）

埼玉県支部（山田祐司）／千葉県支部（岩崎隆）／東京都支部（鈴木康幸）／神奈川県支部（米山拓未）／新潟県支部（小林紀昭）／石川県支部（宮本広之）／静岡県支部（伊久美和秀）／愛知県支部（高見紀雄）

／近畿支部（山田拓広）／岡山県支部（三宅秀俊）／広島県支部（藤原忍）／鳥取県支部（石亀靖）／島根県支部（仲佐修二）／山口県支部（殿井正敏）／四国支部（米谷進吾）

2 事業の概要

【本部事業】

(1)総務事業（※以外はオンライン）

①（一社）日本庭園協会定期総会・

(3・11) ②常務理事会(1・18)

(2・3) (3・22) (4・26) (5・

24) (6・28) (7・22) (8・26)

(9・27) (11・1※) ③理事会(2・

8) (11・1※)

(2)広報事業 ①庭園協会ニュース1

07・110号)の発行 (2)GSJ

ミニニュース(はがき) (第78・80

号)の発行

(3)鑑賞研究事業

新型コロナウイルスの感染拡大に

十分配慮して講演会を中止、会員及

び一般市民に向けた鑑賞会を1回の

み実施。

清澄庭園鑑賞会(12・15)／講演「清

澄庭園／明治の庭の私たち」(龍居

竹之介名誉会長)／「煎茶点前・専

心小笠原流」(加藤精一氏)／清澄庭

園の鑑賞(北村均氏)

(4)技術事業 ①伝統庭園技塾 新型

コロナウイルス感染予防のため活動

中止

②庭園技術連続基礎講座「庭に向か

たい」仙波太郎氏(8・28)／「庭づくりの基本を身につけたい方へ」石亀靖氏(9・25)／「島根県の庭・ベトナムでの作庭」仲佐修二氏(9・25)③みんなの緑学／「現代日本庭園の巨匠たち・飯田十基」龍居名誉会長(5・13)／「現代日本庭園の巨匠たち・小形研三」龍居名誉会長(10・7)／「長尾欣也とよね」その人物と本宅・別邸の庭を巡って」加藤映氏(11・24)④ロングラン講演会「日本の庭を生活文化から眺めて」龍居名誉会長(5・18)(6・15)(7・20※)(9・21)(10・19)(11・16)(12・21)※は延期

(5)国際活動委員会

新型コロナウイルス感染症が少しずつ収束を迎える中、海外における活動が再開。欧州では各国で活動していた日本庭園関連の団体を統括する動きの中で「欧州日本庭協会」が設立した。アメリカでは、ポートルランド日本庭園で「技と心のセミナー」が再開し、2019年に当協会が国土交通省「海外庭園再生プロジェクト」で修復実施したシカゴ市「大阪ガーデン」では2025年に向けて再整備が検討されている。

欧州日本庭園協会設立記念式典に参加(6・1)／アメリカポートルランド日本庭園の「技と心セミナー」

に講師派遣・細野達哉氏(7・22)／アメリカイリノイ州シカゴ市の「大阪ガーデン」視察(8・2)／北米日本庭園協会 ロック・フィールドの「地方大会」参加(8・4)10

【支部事業】

◆北海道南支部

(1)会議の開催 ①支部総会(1月)
②役員会(2月、3月、5月、12月)
(2)技術事業 ①七飯鳴川の割栗石での張石の講習会(6月・10月)②研修旅行・石川県・福井県方面(10月)

◆宮城県支部

(1)会議の開催 ①支部臨時総会・高橋康夫会長講演(6・26)②役員会(1・24)(11・12)

(2)技術事業 ①東日本復興記念庭園維持管理・落ち葉清掃他(3・27)

／柴垣講習会・横山英悦氏(5・3)⑤／除草、清掃・トヨタ自動車東日本ボランティアグループ(6・11)(7・2)(9・3)(11・5)／

除草、清掃・会員(7・31)／除草、清掃・宮床老人会(9・28)／西法面の刈払い、清掃・会員(10・2)

②ミニ講座・庭のデザインについて・竹田利光氏(1・24)／庭の写真の撮り方・ササキシゲル氏(2・28)

／・バラの管理について・志賀奈緒子氏(3・30)／お伊勢参りの旅庭師と土地神様の話・川村博崇氏

(4・28)／茅葺屋根から見た景色・小林功氏(5・28)／茅こうアトリエ見学(7・30)／「環境再生医矢野智徳の挑戦」上映会(7・30)／最新の電動工具について・荒井氏(9・2)／はさみを研ぐ・菊地新太郎氏(9・30)／木材を学ぶ・千葉隆平氏(10・28)／わらボッチを編む 川村博崇氏(11・12)③仙台フォーラス・会員による作品展示(竹田利光氏・高橋雅知氏・及川和俊氏)(3・25)11・15

◆栃木県支部

コロナ禍のため事業なし

◆茨城県支部

(1)技術事業 ①講習会・土間たたき講習会(茨城県造園技能士会協賛)・古平貞夫氏(10・22、23)②見学会・茨城の庭「常陸大宮市岡山邸庭園(養浩園)」(10・1)

◆埼玉県支部

(1)会議の開催 ①支部総会(1・30)②役員会(1・17)(5・11)(6・1)(8・30)(11・11)(12・22)
(2)技術事業 ①研修会(竹の構築)(2・4)②専門学校授業協力(土堀構築)(10・28)③冊子『Vintage』発行(11月)④作品発表会(12・11)

◆千葉県支部

コロナ禍のため事業なし

◆東京都支部

(1)会議の開催 ①支部総会(6・25)②役員会(7・27)(8・26)③忘年会(12・23)

(2)技術事業 ①日比谷公園ガーデンショー2022ライフスタイルガーデン出展(10・22)②見学会(バスツアー)厚澤秋成氏作個人庭・遠山記念館庭園・平井孝幸氏作個人庭(11・5)③奥多摩方面山登り(11・19)

◆神奈川県支部

(1)会議の開催 支部総会(中止)役員会(中止)

(2)技術事業 ①土堀講習屋根仕上げ(コロナ禍で延期が重なり2年の歳月を費やし延べ600人工程から完成)(3・21、22)／関係者を招き土堀完成お披露目会(6月)②鎌倉市内の庭園見学会(中止)

◆新潟県支部

(1)会議の開催 ①支部総会(書面決議)(2月)②役員会(1・22)(4・8)(5・27)(9・22)(12・3)③忘年会(12・3)③全国支部長連絡協議会(オンライン)(1・22)主催
(2)技術事業 ①支部主催伝統庭園技塾・石泉荘 アカマツ剪定(6・14、15)／貞観園 低木剪定(6・30)

②新潟県庭園視察研修会(本部共催)(7・2、3)③特別研修会・貞

観園庭木剪定(10・13、14) ④支部
県外研修会(山梨 大村美術館等)
(10・16、17)

(3)その他の事業 『備忘録 田中泰阿
弥第六章』発刊(5・11)／『備忘
録 田中泰阿弥第七章』発刊(7・
26)／『備忘録 田中泰阿弥第八章』
発刊(9・8)／『備忘録 田中泰阿
弥第九章』発刊(10・17)／『備忘
録 田中泰阿弥第十章』発刊(11・
14)／『備忘録 田中泰阿弥第十一
章(最終章)』発刊(12・12)

◆石川県支部

(1)技術事業 沼津垣の作成・手法
(6・4、5)／松明 井筒蓋(三本
綱二枚梅飾り)作製(11・20)

◆静岡県支部

(1)技術事業 ①講習会 桂垣の作製
(4月)／臥雲寺庭園改修・石垣の直
し、日干し煉瓦土塀(毎月末) ②視
察研修 石造技術古代燈籠(6月)
(7月)(9月)(10月) ③天空の坪庭
展(4月)

◆愛知県支部

(1)会議の開催 支部総会(中止)
(2)技術事業 事業なし

◆近畿支部

コロナ禍のため事業なし

◆岡山県支部

(1)技術事業 見学会・岡山後楽園永
昌橋架け替え工事(1・19)

◆広島県支部

コロナ禍のため事業なし

◆鳥取県支部

(1)会議の開催 支部総会(1・29)
(2)技術事業 活動自粛

◆島根県支部

(1)会議の開催 ①支部総会(オンラ
イン)(1・8)

(2)技術事業 炭窯の屋根(茅葺)の
補修(2・14、16)／お月見茶会
(10・10)

◆山口県支部

コロナ禍のため事業なし

◆四国支部

(1)会議の開催 ①支部総会(書面決議)
(6・16) ②役員会(オンライン)(3・
5)(4・2)

(2)技術事業 ①光波測量講習会 コ
ロナ禍の状況の悪化のため中止 ②マ
ツの剪定講習会(9・24)

○第二号議案「令和4年度収支決
算、会計監査報告の件」

収支決算Ⅱ加藤新一郎財務委員長
会計監査Ⅱ野村脩監事
収支決算報告および会計監査報告
(7ページ参照)が説明された。

○第三号議案「令和5年度事業計画
の件」

組織方針Ⅱ加藤総務委員長

本部事業説明Ⅱ加藤総務委員長／

廣瀬技術委員長／

小沼広報委員長／

曾根国際活動委員長

支部事業説明Ⅱ廣瀬技術委員長／

各支部長

令和5年度事業計画の概要

◆日本庭園協会組織方針

2022(令和2)年1月に新型
コロナウイルスの感染が確認されて
から今日に至るまで新型コロナウイルス
の感染拡大は収束に至っていない
が、昨年は緊急事態宣言が発令さ
れることはなく、ワクチン接種も拡
大し「気をつけながら以前の日常に
近い生活」が戻っている。

昨年の日本庭園協会事業において
は、「会員一人でも新型コロナウイルス
感染症に罹らない」という大命題
の下で対面での総会の中止、伝統庭
園技藝を中止したが、庭園技術連続
基礎講座のオンライン化、龍居竹之
介名誉会長のロングラン講演会を対
面で開催、鑑賞研究委員会による清
澄庭園鑑賞会など感染対策をしっか
り行いながら事業展開を図った。
今年度においては、政府が新型コ
ロナウイルスの感染症法上の位置付
けを5月に「2類」から「5類」に
引き下げる方針を示しているので、

新型コロナウイルスの感染拡大の動
きに十分気をつけながら、対面によ
る総会の実施などできるだけ従前の
ような事業展開を図ることとする。

また、今年度は日本庭園協会創立
105年という節目の年であり、創
立105周年記念事業を会員の皆様
と共に実施する。さらに、今年は公
園制度制定150年、日比谷公園開
園120年という年でもあることも
踏まえた事業を展開する。

なお、海外の日本庭園団体といっ
その連携を図るとともに技術交流
を推進する。

1 世代交代を目指す

時代の変化が激しい中、若手の登用
を積極的に推進し、その感性により、
時代に適合した協会運営を目指す。

2 オンライン活用

新型コロナウイルスの感染拡大は
まだ収束宣言が出されていない状況
であり、対面方式による事業展開が
難しい情勢もあるが、オンラインの
特性を積極的に活用し事業の推進を
図る。

3 日本庭園協会創立105周年記 念事業

今年度は、日本庭園協会創立105
年となるので、会員の皆様と一体と
なって記念事業を実施する。

○2018(平成30)年に実施した

都指定名勝清澄庭園再評価プロジェクト連続講演会の講演記録を一冊にまとめ、国指定名勝へのきっかけづくりとする

○公開シンポジウム、講演会の開催

○ゆかりのある庭園における鑑賞会の実施

○本多静六初代会長の設計で、日本で最初の近代的洋風公園である日比谷公園の国指定名勝の推進を図る

4 様々な事業展開

地球温暖化、生物多様性保全、SDGsという社会的課題を踏まえて「見える化」を図りながら積極的に各事業を展開する。

○龍居名誉会長の連続講演会の開催

○庭園技術の向上及び伝統庭園技術の保存を図る

○庭園協会ニュース、ホームページ、協会パンフレットの更新など最新情報を速やかに伝える

○市民に開かれた鑑賞会の実施

○国及びポートランド日本庭園などと連携し、庭園技術を世界に伝える

○公園制度制定150年に関しては関係団体と連携した事業展開を図る

5 地域に根差した独自の支部活動を展開する

支部設立の目的は、当協会の事業展開を全国的な広がりにするために、それぞれの地域が独自の活動を

行うことによって、庭園文化をさらに発展させるといえるものである。

そこで全国支部長連絡協議会を支部と本部の交流の場と位置づけ、より緊密な事業展開を進める。

なお、各支部はそれぞれ独自の活動を行い、個性豊かな事業展開を図り、本部と一体となって地域に根差した活動を展開することとする。

今年度は庭園協会創立105年の年であり、全国展開を図るためにも九州支部の設立を目指す。

【本部事業】

すべての事業は、新型コロナウイルス感染症状況を踏まえ、安全第一として適切に判断し実施する。

(1) 総務事業

○総務事業 ①定期総会、評議員会、理事会等の各種会議の開催運営 ②創立105周年記念事業の実施・運営 ③協会の事業、活動を、ホームページ等を活用し、内外に発信

④ホームページの運営・管理

(2) 広報事業

①庭園協会ニュースの発行（年間4回）（111～114号）②GSJニュースの発行（全会員へのはがき通信）ほか、事業計画に従い随時発行予定③（一社）日本庭園協会の案内パンフレットの作成④「清澄庭園連続講演会」冊子の作成⑤SNSの運用を開始

（本件の説明は由比まゆみ氏）

(3) 鑑賞研究事業

①一般市民に向けた鑑賞会を実施する（年2回程度）②技術委員会と連携した鑑賞会を実施③創立105周年記念事業と連携した鑑賞会の実施④タイムリーな話題をテーマにした講演会を実施

(4) 技術事業

①伝統庭園技塾（内容計画中）
②庭園技術連続基礎講座・5月より毎月最終日曜日5回開催予定（オンライン）③みんなの緑学「長尾欽弥とよね・庭園と美術品」秘められた長尾家の遺産「加藤映氏（4・27）／「浅草寺・伝法院庭園における修復工事について」藤元裕二氏（6・6）④共催講座 近畿支部と本部の共催講座（日程調整中）
(5) 国際活動事業
①北米日本庭園協会（NAJGA）と連携し、日本庭園の海外普及啓発に努める②ポートランド日本庭園と連携し、技術等協力を行う③欧州日本庭園ネットワークとの連携に向けて、協定の成立を行う④オーストラリアガーデン評議会（AGC）との連携に向けて、協定の成立を行う⑤大阪市建設局と連携を図り、アメリカシカゴ市のジャクソンパーク内のフェニックスガーデン修復事業に向

けて協力を行う。

【支部事業】

◆北海道南支部

(1) 技術事業 講習会・昨年に引き続き張石（数回を予定）

◆宮城県支部

(1) 技術事業 ①東日本大震災復興記念庭園維持管理（地域企業ボランティアグループの受入れ）／西側の道路脇法面の石積修景、駐車場整備（記念庭園整備の完結）②石積講習会予定日（4・29～5・7）

(2) 広報事業 SNSにて会員作品紹介

◆栃木県支部

支部総会、見学会等の実施を検討

◆茨城県支部

(1) 会議の開催 ①支部総会（3月）

②反省会・忘年会（12月）

(2) 技術事業 ①講習会（11月）②見学会・茨城の庭園・和田邸（水戸市）

（3月）／庭園（未定）（10月）※本部や他支部の事業に積極的参加

◆埼玉県支部

(1) 会議の開催 支部総会（2・5）

(2) 技術事業 ①研修会（6月）（10月）②見学会・厚澤秋成氏庭園（4・22）③作品発表会（12月）※その他テクノ・ホルティ園芸専門学校での授業協力を予定（日程調整中）

◆千葉県支部

(1) 技術事業 支部会員の庭見学会、

支部会員の生まれ故郷の山々見学旅行（時期未定）

◆東京都支部

- (1) 会議の開催 支部総会（5月）
(2) 技術事業 ①講習会（10月）②見学会・庭園見学バスツアー（7月）

③山登り（5月）

- (3) 広報事業 SNSによる発信を随時行う

◆神奈川支部

- (1) 会議の開催 支部総会（中止）
(2) 技術事業 4月までは活動休止。5月以降に状況を見ながら活動再開の予定

◆新潟県支部

- (1) 技術事業 ①研修会・本部講師による技術研修会②勉強会・県外研修栃木方面（アートビオトープ・古峯園等）（10月頃）／県内研修 新潟市の中野邸等（6月頃）

◆石川県支部

- (1) 技術事業 ①講習会・北山台杉の管理、手法（5～6月）②研修会・県外研修（10月中旬）

◆静岡県支部

- (1) 会議の開催 支部総会（3・18）
(2) 技術事業 ①講習会 茶室と茶庭をつくる（6月から）／臥雲寺庭園改修（毎月）／安諸塾（時期未定）
②天空の坪庭展（4月）

◆愛知県支部

- (1) 会議の開催 支部総会（オンライン）（2・24）

- (2) 技術事業 ①見学会・愛媛県（創造園）（9月）②庭園展示会・三越百貨店名古屋店屋上（9月）

◆近畿支部

- (1) 会議の開催 全国支部長連絡協議会開催（オンライン）（1・28）
(2) 技術事業 ①見学会・全国支部長連絡協議会見学会（日程調整中）②支部会員拡大に向け活動

◆岡山県支部

未定

◆広島県支部

- (1) 技術事業 秋以降見学会の開催を予定

◆鳥取県支部

- (1) 会議の開催 支部総会（1・29）
(2) 技術事業 鳥取県中部の文化財的庭園見学会（未定）

◆島根県支部

- (1) 会議の開催 支部総会（1・28）
(2) 技術事業 ①研修会・奥野邸剪定、整備（1・16）／その他・アカマツ研修会、はちみつ講習、ツバキ油を作る、茶会（安来柴田家茶室にて）ほか検討中②見学会・旧奥野邸モニターツアー（1・27）／須田郡司氏と行く出雲巨石ツアー（2・4）

◆山口県支部

- (1) 会議の開催 ①支部総会（6月）

②幹事会（6月）

- (2) 技術事業 総会後新役員により支部活動を計画、決定

◆四国支部

- (1) 会議の開催 ①支部総会（5月）
②役員会（オンライン）（2・9）
③（3・4月）（7月）（9月）

- (2) 技術事業 ①講習会・光波測量講習会（シリーズ化して複数回開催）
②（6・7月）／マツの剪定講習（6・7月）②視察研修会・大洲城石垣修復現場、臥龍山荘、盤泉荘、仙波太郎氏作品・城戸邸（2・18～19）③「臥龍山荘 国名勝指定記念シンポジウム」（パネラー・元支部長 水本隆信氏）参加（2・19）④植木生産地見学会（7～8月）⑤見学会（10～11月）

○第四号議案「令和5年度収支予算の件」

予算説明Ⅱ加藤（新）財務委員長
令和5年度収支予算（8ページ参照）が説明された。

○第五号議案「役員補欠選任の件」

趣旨説明Ⅱ高橋会長
今回の役員補欠選任は、菊地正樹常務理事・副会長の退任による補欠および若手の登用によって行うものである。

新副会長に廣瀬常務理事、新常務

理事に清水哲也理事、新理事に石川治彦評議員、新評議員に廣瀬辰臣氏が推挙された。最後に長年にわたって本協会の運営にご尽力いただいた菊地正樹氏が名誉会員に推挙された。

○第六号議案「総会議決事項の委任の件」

趣旨説明Ⅱ高橋会長
総会において議決すべき下記事項として、①令和5年度事業計画に関する件、②令和5年度収支予算の補正及び特別会計に関する件を常務理事会に委任するものとする。

○第七号議案「その他の件」

趣旨説明Ⅱ高橋会長
本多静六初代会長の設計による近代的洋風公園・日比谷公園を国指定名勝とする推進活動についての説明がなされた。

以上、全ての議案は審議の結果、原案のとおりで承認された。

令和5年度（一社）日本庭園協会定期総会には内田副会長の閉会の辞により、無事終了した。

総会終了後、北村理事の案内で清澄庭園を散策し、引き続き懇親会が開かれ、参加者は4年ぶりに対面の親交を深めた。

収支計算書

2022年1月1日～2022年12月31日まで

(単位:円)

科 目	予算額	本年度決算額	増 減	備 考
事業活動収入				
①入会金収入				
入会金収入	100,000	60,000	40,000	
②会費収入				
受取会費	6,500,000	6,301,300	198,700	
③事業収益				
講座収入	450,000	836,600	△ 386,600	録音、遠隔視聴講座、オンライン講演会
鑑賞研究講演会	60,000	0	60,000	
鑑賞研究見学会	120,000	120,000	0	
庭園協会賞講演会費	0	0	0	
受託事業費	100,000	683,680	△ 583,680	モスクワ日本庭園修復、松達寺庭園修復
④雑収益				
受取利息	15	21	△ 6	
雑収益	0	201,000	△ 201,000	寄付、冊子販売
事業活動収入計	7,330,015	8,202,601	△ 872,586	
1 事業費支出				
1-1 広報委員会費				
会報印刷費	1,100,000	1,026,354	73,646	
会報郵送料	500,000	397,923	102,077	
会報取材編集費	100,000	66,818	33,182	
パンフレット作成費	200,000	0	200,000	
1-2 鑑賞研究委員会費				
鑑賞研究講演会	60,000	0	60,000	
鑑賞研究見学会	100,000	197,424	△ 97,424	
1-3 技術委員会費				
1-3-1 講座費				
講師謝礼	300,000	340,000	△ 40,000	
講師旅費交通費	100,000	109,000	△ 9,000	
事務・会場手伝い謝礼	120,000	9,140	110,860	
講座会場費	195,000	343,910	△ 148,910	
講座用事務・消耗品費	170,000	167,544	2,456	
1-3-2 地方講演会費				
講師謝礼	20,000	100,000	△ 80,000	
講師旅費交通費	60,000	0	60,000	
1-3-3 伝統庭園技塾				
講師謝礼	200,000	0	200,000	
講師旅費交通費	100,000	0	100,000	
1-3-4 文化財指定庭園保護協議会年会費	15,000	15,000	0	
文庭協总会負担金	60,000	56,000	4,000	
1-4 国際活動委員会費				
NAJGA 年会費	50,000	29,685	20,315	
国際交流費	100,000	102,322	△ 2,322	モスクワ日本庭園修復事業ロシア語翻訳料
1-5 文化財指定庭園調査・修復費	200,000	0	200,000	
2 管理費支出				
2-1 定期総会費				
総会用事務費	80,000	90,894	△ 10,894	
庭園協会賞講演会費用	100,000	0	100,000	
2-2 会議費				
事務費	10,000	12,000	△ 2,000	
会場費	100,000	156,790	△ 56,790	
役員交通費補助	28,000	25,170	2,830	
2-3 事務局職員給料	1,000,000	880,000	120,000	
2-4 事務局職員交通費	240,000	220,000	20,000	
2-5 ホームページ運営管理費				
ウェブサイト管理費	250,000	198,000	52,000	
サーバードメイン更新料	6,000	13,464	△ 7,464	
2-6 渉外慶弔祝賀費				
渉外費	100,000	65,000	35,000	
慶弔費	50,000	16,500	33,500	
支部活動お祝い金	50,000	0	50,000	
2-8 通信費				
郵便・配送費	250,000	161,554	88,446	
電話料	140,000	128,568	11,432	
2-9 事務用品・消耗品費	200,000	495,639	△ 295,639	
2-10 宣伝広告費	80,000	55,000	25,000	
2-11 水道光熱費	50,000	53,212	△ 3,212	
2-12 賃借料				
事務所家賃	1,000,000	1,041,065	△ 41,065	
コピー機リース料	190,000	184,800	5,200	
2-13 銀行手数料等	100,000	69,172	30,828	
2-14 会計事務所顧問料	80,000	80,000	0	
2-15 諸雑費	14,000	14,000	0	
百周年事業				
式典記念講演製本	600,000	0	600,000	
経常費用計	8,468,000	6,921,948	1,546,052	
当期経常増減額(収入-支出)		1,280,653		
一般正味財産期首残高(昨年度残高)		8,452,183		
次期繰越収支差額		9,732,836		

収支計算書に対する注記

1. 資金の範囲

資金の範囲には、現金及び預金、未収会費、立替金及び未払金、前受会費、仮受金を含めている。なお、前期末及び当期末残高は、下記2.に記載するとおりである。

2. 次期繰越収支差額に含まれる資産及び負債の内訳

(単位:円)

科 目	前期末残高	当期末残高
現金及び預金	8,615,749	9,732,836
合 計	8,615,749	9,732,836
未払金	163,566	0
源泉所得税預り金	0	0
震災復興庭園寄付預り金	0	0
仮受金	0	0
合 計	163,566	0
次期繰越収支差額	8,452,183	9,732,836

貸借対照表

2022年1月1日～2022年12月31日まで

(単位:円)

科 目	金額	科目	金額
I 資産の部		II 負債の部	
1. 流動資産		1. 流動負債	
現金	23,786	未払金	0
普通預金(みずほ)	2,796,368	流動負債合計	0
振替貯金	6,685,334	負債合計	0
通常貯金(ばるる)	227,348	III 正味財産の部	
定期預金	0	1. 一般正味財産	9,732,836
流動資産合計	9,732,836	正味財産合計	9,732,836
資産合計	9,732,836	負債及び正味財産合計	9,732,836

財産目録

2022年1月1日～2022年12月31日まで

(単位:円)

科 目	当期末残高
I 資産の部	
1. 流動資産	
現金預金	
現金手許有高	23,786
普通預金 みずほ銀行(メイン)	2,615,363
口座番号 1716382	
普通預金 みずほ銀行(国際)	1,000
口座番号 1159951	
普通預金 みずほ銀行(技術)	180,005
口座番号 1159943	
振替貯金 ゆうちょ銀行(寄付金)	146,184
口座番号 00140-4-665089	
振替貯金 ゆうちょ銀行(メイン)	6,539,150
00110-5-76081	
通常貯金 ゆうちょ銀行(ばるる)	227,348
10040-50368701	
定期預金 みずほ銀行	0
資産合計	9,732,836
II 負債の部	
1. 流動負債	
未払金	0
負債合計	0
III 正味財産(資産合計-負債合計)	9,732,836

監査報告書

下記監事3名は、一般社団法人日本庭園協会において、会長の提出した2022年度における会務の執行を総括した会費収入の「事業活動支出」の内訳並びに「収支決算書」「正味財産増減計算書」「貸借対照表及び財産目録」等につき監査した。

監査の結果、会務の執行は当該協会の定款に基づき誠実に行なわれており、正確に処理されていることをとめます。

令和5年 2月 3日

一般社団法人 日本庭園協会
監事 野村 脩/同 中村 寛/同 小泉 隆一

正味財産増減計画書

2022年1月1日～2022年12月31日まで

(単位:円)

科 目	予算額	本年度決算額	増 減
I 一般正味財産増減の部			
事業活動収入			
(1) 経常収益			
①入会金収入			
入会金収入	100,000	60,000	40,000
②会費収入			
受取会費	6,500,000	6,301,300	198,700
③事業収益			
講座収入	450,000	836,600	△ 386,600
鑑賞研究講演会	60,000	0	60,000
鑑賞研究見学会	120,000	120,000	0
庭園協会賞講演会（総会）費	0	0	0
受託事業費	100,000	683,680	△ 583,680
④雑収益			
受取利息	15	21	△ 6
雑収益	0	201,000	△ 201,000
事業活動収入計	7,330,015	8,202,601	△ 872,586
(2) 経常費用			
①事業費			
1-1 広報委員会費			
会報印刷費	1,100,000	1,026,354	73,646
会報郵送料	500,000	397,923	102,077
会報取材編集費	100,000	66,818	33,182
パンフレット作成費	200,000	0	200,000
1-2 鑑賞研究委員会			
鑑賞研究講演会	60,000	0	60,000
鑑賞研究見学会	100,000	197,424	△ 97,424
1-3 技術委員会費			
1-3-1 講座費			
講師謝礼	300,000	340,000	△ 40,000
講師旅費交通費	100,000	109,000	△ 9,000
事務・会場手伝い謝礼	120,000	9,140	110,860
講座会場費	195,000	343,910	△ 148,910
講座用事務・消耗品費	170,000	167,544	2,456
1-3-2 地方講演会費			
講師謝礼	20,000	100,000	△ 80,000
講師旅費交通費	60,000	0	60,000
1-3-3 伝統庭園技藝			
講師謝礼	200,000	0	200,000
講師旅費交通費	100,000	0	100,000
1-3-4 文化財指定庭園調査会費			
文化財指定庭園保護協議会年会費	15,000	15,000	0
文化財指定庭園保護協議会総会負担金	60,000	56,000	4,000
1- 4 国際活動委員会費			
NAJGA 年会費	50,000	29,685	20,315
国際交流費	100,000	102,322	△ 2,322
1-5 文化財指定庭園調査・修復費	200,000	0	200,000
②管理費			
2-1 定期総会費			
総会用事務費	80,000	90,894	△ 10,894
庭園協会賞講演会費	100,000	0	100,000
2-2 会議費			
事務費	10,000	12,000	△ 2,000
会場費	100,000	156,790	△ 56,790
役員交通費補助	28,000	25,170	2,830
2-3 事務局職員給料	1,000,000	880,000	120,000
2-4 事務局職員交通費	240,000	220,000	20,000
2-5 ホームページ運営管理費			
ウェブサイト管理費	250,000	198,000	52,000
サーバードメイン更新料	6,000	13,464	△ 7,464
2-6 渉外慶弔祝賀費			
渉外費（関係団体賛助金）	100,000	65,000	35,000
慶弔費	50,000	16,500	33,500
支部活動お祝い	50,000	0	50,000
2-8 通信費			
郵便・配送費	250,000	161,554	88,446
電話料	140,000	128,568	11,432
2-9 事務用品・消耗品費	200,000	495,639	△ 295,639
2-10 宣伝広告費	80,000	55,000	25,000
2-11 水道光熱費	50,000	53,212	△ 3,212
2-12 賃借料			
事務所家賃	1,000,000	1,041,065	△ 41,065
コピー機リース料	190,000	184,800	5,200
2-13 銀行手数料等	100,000	69,172	30,828
2-14 会計事務所顧問料	80,000	80,000	0
2-15 諸雑費	14,000	14,000	0
百周年記念事業			
式典記念講演製本	600,000	0	600,000
経常費用計	8,468,000	6,921,948	1,546,052
当期経常増減額（収入 - 支出）		1,280,653	
当期一般正味財産増減額		1,280,653	
一般正味財産期首残高		8,452,183	
II 正味財産期末残高		9,732,836	

2023年度予算書

2023年1月1日～2023年12月31日まで

(単位:円)

科 目	予算額	本年度決算額	備考
I 一般正味財産増減の部			
事業活動収入			
(1) 経常収益			
①入会金収入			
入会金収入	60,000	100,000	
②会費収入			
受取会費	6,301,300	6,500,000	
③事業収益			
講座収入	836,600	450,000	緑学、連続基礎講座、伝統庭園技藝
鑑賞研究講演会	0	390,000	105周年記念講演×2回
鑑賞研究見学会	120,000	300,000	一般向け2回、技術委員会と連携1回
庭園協会賞講演会費	0	150,000	
受託事業費	683,680	100,000	
105 周年記念事業	0	100,000	
その他事業	0	100,000	
④雑収益			
受取利息	21	15	
その他	201,000	0	
事業活動収入計	8,202,601	8,190,015	
(2) 経常費用			
①事業費			
1-1 広報委員会費			
会報印刷費	1,026,354	1,200,000	
会報郵送料	397,923	500,000	
会報取材編集費	66,818	100,000	
SNS 運用費	0	100,000	105周年記念事業 SNS 開設
パンフレット作成費	0	550,000	パンフ作成、清澄庭園連続講演会開示
1-2 鑑賞研究委員会費			
鑑賞研究講演会費	0	270,000	105周年記念講演×2回
鑑賞研究見学会	197,424	230,000	一般向け2回、技術委員会と連携1回
1-3 技術委員会費			
1-3-1 講座費			
講師謝礼	340,000	300,000	
講師旅費交通費	109,000	100,000	
事務・会場手伝い謝礼	9,140	120,000	
講座会場費	343,910	300,000	
講座用事務・消耗品費	167,544	170,000	
1-3-2 地方講演会費			
講師謝礼	100,000	100,000	
講師旅費交通費	0	60,000	
1-3-3 伝統庭園技藝			
講師謝礼	0	200,000	
講師旅費交通費	0	100,000	
1-3-4 文化財指定庭園保護協議会費			
文化財指定庭園保護協議会年会費	15,000	15,000	
文庭協総会負担金	56,000	60,000	
1-4 国際活動委員会費			
NAJGA 年会費	29,685	50,000	
国際交流費	102,322	100,000	
1-5 文化財指定庭園等調査・修復費	0	200,000	
1-6 105 周年記念事業費	0	800,000	
1-7 その他事業費	0	100,000	
②管理費			
2-1 定期総会費			
総会用事務・消耗品費	90,894	100,000	
総会会場・飲食費	0	250,000	
2-2 会議費			
事務費	12,000	10,000	
会場費	156,790	150,000	
役員交通費補助	25,170	28,000	
2-3 事務局職員給料	880,000	1,000,000	
2-4 事務局職員交通費	220,000	240,000	
2-5 ホームページ運営管理費			
ウェブサイト管理費	198,000	250,000	
サーバードメイン更新料	13,464	13,000	
2-6 渉外慶弔祝賀費			
渉外費（関係団体賛助金）	65,000	100,000	
慶弔費	16,500	50,000	
支部活動お祝い金	0	50,000	
2-8 通信費			
郵便・配送費	161,554	200,000	
電話料	128,568	140,000	
2-9 事務用品・消耗品費	495,639	300,000	
2-10 宣伝広告費	55,000	80,000	
2-11 水道光熱費	53,212	70,000	
2-12 賃料			
事務所家賃	1,041,065	1,100,000	
コピー機リース料	184,800	190,000	
2-13 銀行手数料等	69,172	100,000	
2-14 会計事務所顧問料	80,000	80,000	
2-15 諸雑費	14,000	14,000	火災保険料
事業活動支出予算計	6,921,948	10,240,000	

第4回 おがた けんぞう 小形研三

小形研三さんの足跡



はじめに

このシリーズでは、庭園界の巨匠の皆さんの足跡のお話をしてきました。今回は、前回の飯田十基の戦後最大の弟子と言っている小形研三のお話をします。

【小形研三プロフィール】

1912～1988年。佐賀県唐津市七山村生まれ。1932年、旧制千葉高等園芸学校を卒業。1932～1934年、飯田十基に師事。1934年9月、東京市保健局公園課に勤務。1942～1945年、兵役応召で中国大陸に派遣。1946年、帰国後、飯田十基主宰の東京ガーデンナーに復職。1958年、東京庭苑株式会社設立。1961年、京史造園設計事務所設立。1978年から日本庭園協会理事、1982年から副理事長に就任。日本大学などの講師を務める。日本造園学会賞(1969)など受賞歴多数。代表作は、米田ワシントン日本大使館内茶室(1960)、ハワイ大学内イースト・ウエスト・センタリーの日本庭園(1963)、川崎市民プラザ(1978)の他、個人邸など多数。

たつひ 龍居 竹之介 (名誉会長)

実は小形とは不思議な付き合いがありました。それは何かと言いますと、私の知らない間の付き合いです。

私は1931(昭和6)年7月29日に生まれました。その翌日、小形はそのことを知ったということでした。ちょうどその頃、私の親父松之助は1923(大正12)年9月の関東大震災で荒れた浅草寺・伝法院の整備を東京市の公園課長の井下清から任されていた。浅草寺の境内は、お寺でありながら1873(明治6)年の太政官布達により日本で初めての公園に指定されていました。したがって震災後も東京市が庭のつくり直しに近いような大整備をしました。それは昭和のはじめから私の生まれたころまで延々と続いておりました。そこに東京市の役人連中が毎日のように来ていました。小形はアルバイトのような形で東京市に入って公園の仕事の手伝いをしていました。それで親父の顔を小形は知っていたわけです。7月30日に親

父が現場で、市役所の連中に「おめでとうございました」と口々に言われ、小形もよくわからないまま一緒になって頭を下げ、誰かに「何がおめでたいんですか」と聞いたたら、「昨日、男のお子さんが生まれたんだよ」と言われ、「あーそうですか。おめでとうございます」と言ったという。だから、何かというとお前の生まれのときを知っているとされた不思議な宿命でございます。

後になって小形が1912(明治45)年生まれだと知ってびっくりしました。私は4人兄弟ですが、15歳違いの長姉と小形は同じ歳だということを知って、小さい頃から親しみを持っていました。

小形には純一という息子さんがおり、成長して京都府立大学農学部を卒業しました。好青年で、「いい造園家になるといいよね。小形さんの跡継ぎは頑張ってくれるからいいよね」と、周囲では言っていました。その純ちゃんの奥さんは京都府立大学の児童福祉科を卒業しており、なんと私のかみさんの後輩でございま

す。これもよくできた話です。

息子純一さんと村越造園

小形はオーストラリアのガーデンショーで日本庭園をつくっている最中に亡くなりました。まもなく純ちゃんも父親の後を追うようにして亡くなってしまう、小形の後継者はなしという寂しい状況です。私が悔しいなと思うのは、小形の培ってきたものを次へ繋げることができなかったということです。小形の話をすることについて、一方では誇らしいところもありますが、一方で寂しいと思うことしきりなのです。

今でも思い出すのは飯田、小形と大変親しかった多摩の村越善男という植木屋のことです。村越は飯田に対しては師匠のように接していましたが、小形とは友達みたいな関係でした。村越は、飯田、小形の両家の若い連中の修業場所だったので。飯田に入った人間も小形に入っただ人間も、みんなとりあえず村越のところに行かされて、そこで3年なり5年なり修業をさせられました。

戻ってきたら、初めて庭づくりの仕事させたのです。

小形も飯田に入った時には植木屋の師匠村越の下で同じような修業をしました。その体験もあって、自分が独立してからもやはり新人は必ず村越のところへやって、何年かそこで勉強させました。

息子の純ちゃんもみんなと同じように強制的に行かされましたが、すごいやになって、家に帰ろうとします。すると、親父は怒る。純ちゃんは反発する。それでも純ちゃんは頑張ったけれども、いろいろと苦労があったと見えて、親父の後を追うように亡くなりました。本当に残念でした。

小形がたどった道

小形は1912（明治45）年、九州の佐賀の生まれです。亡くなったのは1988（昭和63）年、今から34年前です。佐賀県唐津の中学校を出まして、1932（昭和7）年に千葉高等園芸学校（現、千葉大学園芸学部）を卒業しました。この頃、東京市の井下のところに日参して、東京市に入りたいたいと頼みましたが、「残念だけどいっばいで入れんよ」と3回も門前払いをくいました。最後には「いい師匠を紹介するからそこ

へ行つて勉強してこい、折があったら市役所に入れてやるから」と言われて、紹介状を持たされて訪ねたところが飯田だったのです。つまり井下にすれば、「東京市に入る前に、飯田で庭の勉強をしてきなさい」ということでした。待った甲斐あって、東京市に採用されることとなり、飯田に「東京市に行きます」と挨拶したら、「そうはいかない。俺のところの仕事はどうするんだ」と言われ、結局飯田の仕事と東京市の仕事の両方をやるという大変忙しい目にあいました。

小形は飯田で一般の個人邸の庭を勉強してから東京市で公共造園の公園づくりをしました。民間と公共の造園を経験したことは、庭をつくる人間にとってはすごい財産だと思います。

小形は日本の「造園」に対する教育を受けた1期生でした。小形の時代には東京大学で専門教育が始まりましたが、ただしここは最高学府として理論的な講義が多く、実践的な専門教育を行っていたのは小形の通った千葉高等園芸学校が最高峰でした。そこでは第一線の作家というかデザイナー的な造園家としての面や、職人としての面の正規の勉強ができたのです。日本の伝統的な庭、

新しい公園、それから世界の庭、そういうものの全体が見える世代でした。新しい時代の造園人の代表は小形研三だと私は思います。

小形は、東京市に就職してから間もなく戦争に動員されました。2度目の応召ではなかなか帰ってこられず、復員は終戦翌年の1946（昭和21）年でした。陸軍では工兵の将校でした。結局、戦争体験でも現場仕事をしていたという、これもある意味でこの人の力になったということなのです。

「庭ブーム」のきっかけ

小形世代は大変な戦争被害を受け多くの人材を失っています。そのことは庭の世界でも影響が大きく、働くべき世代に穴が空いたようになりました。そこで飯田や私の親父のような明治生まれの還暦になるような世代が、「しょうがない。もう一回頑張ろう」といって、また第一線に出てきたわけです。その空白世代の中で復員してきた小形は頑張つて庭の仕事をやりました。

戦後の東京では焼け野原に家が建ち、その周りに庭がつくられました。戦前の下町はぎゅうぎゅう詰めで庭の余地がなかったのですが、それより少しは敷地が広くなりました。そうするとちよつと庭らしいものが欲

しいという話が出てくる。それが何故か世間的には復興の一つの証みたいな感じで「庭のブーム」が起りました。それに火をつけたのは『婦人倶楽部』、『主婦の友』といった婦人雑誌でした。「生活と暮らし」のページをつくつて、「小さな庭を楽しもう」といった記事が掲載されました。その頃の婦人雑誌は、小庭園のつくり方が売り物でした。その時一番執筆量が多かったのは小形です。なぜなら東京都の公園関係の人がよく執筆を頼まれた中で小形の文が分かりやすかったからです。これが1960（昭和35）年から1965（昭和40）年、東京オリンピックぐらいまで続きました。

次に住宅雑誌が出てきました。住宅雑誌は住宅プラス庭ということ、庭にも力を入れました。その頃には小形はよく知られるようになっていましたから、小形の需要は大きかったのです。

世の中では庭ぐらいいはつくりたいという要望が高まってきて、住宅雑誌に「小庭園」といったコーナーが始められたときには、タイトルは「1坪の庭」、「2坪の庭」、「5坪の庭」、「10坪の庭」と面積に応じた庭のつくり方中心でした。

頭のいい編集者は、毎月掲載して

いるうちに、広さに対する工事費についても考えました。そこで、「1坪の庭」の紹介では、垣根はいくら、石はいくら、トータルでいくらですと値段を記載しました。絵と文章だけより、この庭でいくらだと値段をつけた方がヒットします。その手法のど真ん中に小形はいたわけです。小形は実際の仕事から施主の嗜好や提案への反応などの情報をよく知っておりました。そういう社会状態の中で暮らしていたのです。

その時に飯田のところに行ったという力が出るわけです。その力とは、雑木を庭に活用したということだと思います。雑木は値段が安く、表情がいろいろある。そして関東では手に入りやすいし、とりかえやすい。そうすると、市役所の職員が描いている絵空事の庭よりも現実性があるため、それがうけるわけです。つまり小形の名前が上がっていく。それで結局、個人の庭との付き合いが広がったのです。

戦前、大きい植木屋の親方たちがつくっていたのは、資産家の庭です。大名の庭をつくっていたときの続きみたいなもので、100人も200人も職人を抱えていました。戦後はそんなことはできませんから、庭師社会は仕事を求めてまず駐

留軍関係の仕事に集中せざるを得ませんでした。焼跡整備もそこそこに生活の場をつくり出すのに精一杯というありさまでは、庭づくりなど問題外なのは当然でしょう。

しかし戦災からの復興が進むに従って、住宅も店舗も少しずつ落ちつきを取り戻し、人々は庭にも目を向けるようになります。

当然そうした社会の動きを着実に受けとめた小形は持ち前の研究心で、人々が求めだしたいわば時代に合った庭の姿、ありようといったものについて模索を続けたようです。雑誌の仕事でもそんなヒントを得たようです。

その陰には飯田で教わった、大げさな「つくり庭」ではなく雑木を配したような質素な庭、しかも取り替えがきく庭という考え方が生きています。つまり1本のマツを植えたら3000年もつというような庭ではなく、そのお客が生きている10年間をねらってつくりまします。10年たったら、子供の世代にも向くような庭に替えようという割り切り方をしました。その時代に生きた人間が楽しめるようにということです。

小形も飯田も、風が吹いて、枝がそよともしないような風情がないものは庭じゃない、材木が立っている

だけじゃないかという感覚です。つまり、庭は変わるのが当たり前。実際雑木なんか成長し勝手に増えます。しかし、雑木ばかりの庭では、冬になつたら家の中が丸見えになってしまう。そういうことがないように、やはり常緑樹も必要なんだと考える基本姿勢がありました。

小形は執筆活動によって、庭を全く知らないような人たちとも付き合いができました。ですから、大きな庭のお客ばかりを探すのではなく、狭いなりに敷地を活かした小庭園の普及にも力を注いだのです。

施工と設計の2本立て

小形には飯田と井下という2人の大師匠がいました。飯田からは「雑木の庭」のような静の庭を学び、井下からは公園について学びました。

小形が偉いと思うことは、一つの会社で設計と現場をやるのではなく、別会社として造園施工の専門の「東京庭苑」と設計専門の「京央造園設計事務所」という2本立てとしたことです。

京央造園設計事務所の名前のきっかけとなった仕事は、新宿中央公園です。小形の大きな仕事の出だしの頃の仕事です。京央造園の京は東京の「京」、央は中央の「央」です。研

三小形で「K.O.」かと言ったら、小形が冗談じゃないと怒るわけです。では何なんですよと聞くと、「東京の真ん中だよ」。これは東京の真ん中に公園をつくったという自負なのです。

日本の都市公園の代表は日比谷公園と誰しも考えます。いわゆる西洋ムードも感じる公園だから純日本式の公園との意識は少ないわけです。

しかし実際には、日比谷公園には築山や池があつて日本庭園の要素がいくらでも入っている。小形も公園の仕事をするときに、日本的な雰囲気を加味していくことを心掛けました。

小形の晩年の仕事に私も一緒にした昭和記念公園の中の日本庭園があります。でもこれは公園の中に日本庭園をとり込ますというものとはちよつと違う気がします。昭和記念公園という大きな公園の一部分に日本庭園があるという感じで、同化してないのです。

形の整ったデザイン、シンメトリーというようなデザインばかりが公園だというのはなくて、もっと柔らかなある風情を入れるのは当然だという考え方で進めていきました。とにかくその形を崩して、周囲の環境となじませていくのはえらいなあと思います。そういう意味では、他にも良い作品が東京周辺でも見かけられま

す。先を見るといいのか、公園の仕事と住宅庭園とを両方やってきた経験の力だと思っています。

そういう構想を年中考えているということは、そばにいてよくわかりました。私が全然覚えてはいないようない。一緒に入った蕎麦屋で聞いた話でも、小さな箸袋に一生懸命メモしたりする勉強家でした。

小形研三作庭例

小形の活躍期の作品を6例紹介しましょう。

○捧邸（東京都文京区西片）

1950（昭和25）年の作庭です。この庭は小形式ともいえる特有の「逆流れ」が特徴です。

昔からの日本庭園での演出は、庭の奥に築山があつて、その辺りから水が流れてきます。例えば植治がつくった京都の無鄰菴もこの手法で、施主の山縣有朋はそれを楽しみました。

しかし、「小形式」は逆の発想で、建物のそばから水が出て、どんどん離れていきます。このような発想は大変珍しく面白いので、お客さんは喜びます。うるさくなく音を出して、そして水が動き、最後は遠く離れてほとんど分からないような小流れとなっています。

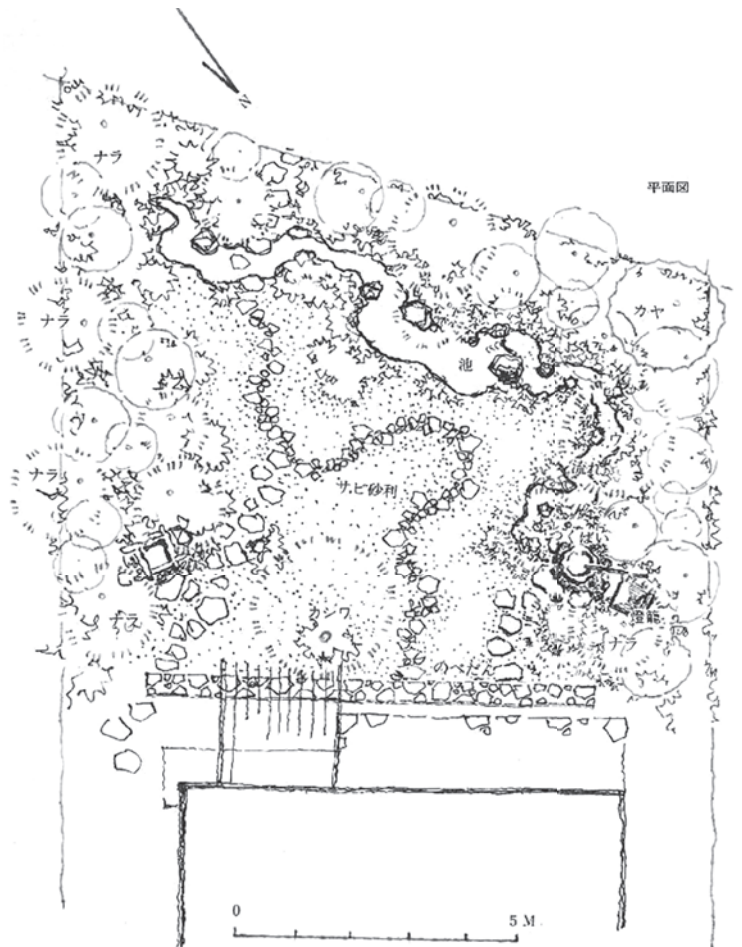


図1 捧邸庭園 平面図

平面図（図1）を見てみましょう。

建物西側の前に蹲踞があります。この蹲踞が水源になって、くねくねと南東の方に流れていきます。これが小形式の流れです。

遠くに小流れをつくって、その手前にサビ砂利を敷き、その中に石を並べて少し段差をつけています。一本のカシワを隔てて手前から向う側に流れが広がっていく。建物から見ると中心から右へかけて重心があります。要するに、庭全体の流れというか、氣勢が生まれます。正方形ではない不思議な形をしている地形を

利用して、流れを西側に寄せて、動きのある大きい景観をつくっています。

このような全体構想は小形の色だと思います。この「逆流れ」の庭は1975（昭和50）年まで3回の改造を行っています。

○岸本邸（三鷹市井の頭）

1975（昭和50）年に完成したこの庭も「逆流れ」です。平面図（図2）を見ると、和室の前の蹲踞の水が水源になっています。この水が建物を離れて南の方へ大変曲がりくねって、西の角のところで東へ曲がります。この辺に小滝を落として、さ

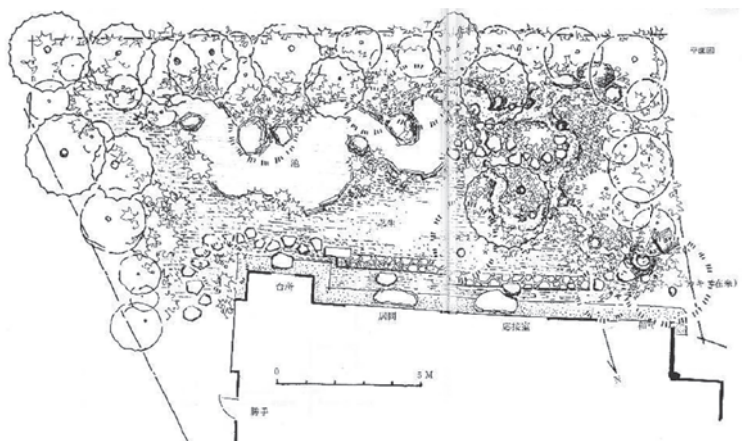


図2 岸本邸庭園 平面図

らに回っていく。そうすると両方から島がでてくる。

庭の真ん中辺りから少しずつ流れの幅が広くなり最終的に広い池になります。最後のコーナーには大きな景石が据えられ、左方に消えて池尻となります。

手前は明るい芝生地で、結構景石や飛石もありますし、なかなか変化に富んだ庭です。基本的に水の流れは手前から奥へですが、先ほどの捧邸とは様子が違います。ここでは氣勢が右から左にかけて流れていることがはっきりわかるわけです。同じ

「逆流れ」とはいえ、氣勢といった意味で面白いと思います。

○有田邸（鎌倉市山の内）（図3）

1965（昭和40）年に作庭されたこの庭は、一見「逆流れ」の庭に見えますが、少し様子が違います。

門を入ると、すぐ左側に庭門があります。右に行けば玄関になります。庭門を入るとすぐに蹲踞があり、手水鉢が低く組まれており一見水源のようですが、この水はどこにも流れていません。庭門からは敷石の道、延段が右側に走り、その間

はずっと明るい芝庭です。

軒内は深草三和土で、建物からは少し離れています。右に行くと突き当りに井戸風の井筒があり、こちらが水源のようですが、水のない流れになっています。

建物から見て右左に蹲踞と井桁のポイントを置いており、中心が二つ見えますが、全体を見ると芝生中心の明るい庭です。

伝って行くと次第に景色が変わっていきます。このような工夫も面白いと思います。



図3 有田邸庭園 平面図



図4 田代邸庭園 建物側から蹲踞と芝生に向かう飛石を見る

○田代邸（港区白金三光町）（図4）

この庭の面白いのは、騙されるところです。流れが始まるなどと思うと、飛石の園路になっていて、流れがないのです。捧邸も岸本邸も飛石の部分は流れになっています。ですが、飛石の先には流れがあるので、す。ちょうど建物から見ると真正面に流れがあるので、この姿をたどって左側の方へ行くと、水源らしきものは見えない。結局これは枯れ流れて、見るものは騙されるわけです。庭中央の芝生はとても明るく、その

向こうに枯れ流れがあると風情がまた違うわけです。

水を流すのは技術的にも大変難しく、経済的な負担もあります。施主との話し合いで水はちよつとということになり、でもこの風情は活かしたいということで枯れ流れになったのかもしれない。

田代邸は1975（昭和50）年につくられています。同じ年に岸本邸ほか数ヶ所の庭がつくられています。それらは同じような感じながら、それぞれに変化を上げています。

○志村邸（青梅市東青梅）（図5）

建物の周りを庭が囲んでいます。北側に門があり、門を入れて敷石を斜め左に行くと玄関があります。この門を入った正面には水鉢が構えられて、水を落としています。その右側には道がありますが、ここは歩くということを中心にまとめてあります。

建物は桂離宮のような雁行した配置です。普通こういう建物の庭は、一部屋ごとに別々の顔にします。和室と応接室との間に垣根や塀をつくり、別の庭にする。その隣のところも袖垣などで区切って、また別の庭をつくる。こんな風に小庭をつくるのが江戸時代では一般的でした。

しかし、ここは一つの流れの延長線上に庭をつくることで、それぞれ



図5 志村邸庭園 居間(正面)と応接間の間に設けた流れ



図6 西野邸庭園 在来のマツを残し、広がる芝生と一つの景観にまとめ上げている

に氣勢というものが感じられます。全体として見ても一つの庭になっています。

この庭の特徴は、小流のようなおとなしい流れではなく、少し高さをとって滝の水を落とすという景色も楽しめることです。これはこれなりにアイデアを要します。各部屋から見える庭はほかの庭と同じ感じにしないという難しさもあります。

この水源は、建物のそばに置いた蹲踞の手水鉢に笥から水を落としています。建物からだんだん離れ庭の方に流れていく。だから建物の中から見ても動く水源の景色が見えます。

す。この庭も逆流れの発想です。住む人としては面白いと思います。

1974 (昭和49) 年作庭

○西野邸 (藤沢市鵠沼) (図6)

これは全く異色で私が好きな庭です。元々この家はマツが多かったようですが、買い足して増やしています。なかなか住宅庭園でマツ林はできません。しかも、建物は洋風で、青石のテラスです。材料とデザインの仕事がわかるわけです。真ん中に芝生、その中にマツだけです。ずっと奥の方に飛石の道があります。裏側の方から庭のマツ林と建物が見えるようにつくってあるわけです。こ

れは相当意表を突いたものです。建物の左側の四角い御影石の飛石の道は上へ上がってきます。この飛石の左側は「小松石線積み」となっています。その園路を辿って行くと、そこにも青石テラスがあります。そのすぐ右に「青石小端積み」があります。右の方は建物前からの「青石乱張りテラス」があつて、このテラスの背中のところはみんな石積になっています。つまりこのマツが入っている真ん中の芝生のところは低いのです。石積をして周りを上げるだけで、マツの樹形や根元が生きてくる。ずっと同じ平面ですと、マツが

生きません。たった数十センチの違いですが、周りには灌木を植えてやわらかくしています。そういう木の特徴を生かし、植え方も植える場所も工夫する。要するにこれもアイデアでしょう。

1952 (昭和47) 年作庭

おわりに

小形はいろいろな面で大変な先駆者だと私は思っています。現代の造園家の中では、図抜けて大きな影響力を持った人だったと思います。ですからこの人の後を継ぐ人がいないことは残念です。こういう経歴を辿らないと、小形のような人は出ないのかという寂しさもあります。これからは、小形とは違う勉強法でもこういう人に近い作庭家が出てこないかなと切望している次第です。今日は久々に、そばを食いながら小形さんと喋っているつもりでお話しました。いつもこんな調子で二人で喋っていたのが懐かしいです。何かの参考にしていただければありがたいと思います。(名誉会長)

(文中、敬称略とさせていただきます)

図版：P9プロフィールの写真は『庭別冊55』

その他すべて『庭別冊7』より

参考文献

『庭別冊7』、建築資料研究社、1978

庭に向かう私の姿勢

第5回 『庭づくりの基本を身に付けたい方へ』

いしがめ やすし
石亀 靖

2022 (令和4) 年9月25日 (日) オンライン講座

本日、伝えたいことは、「庭は楽しい」ということです。私なりの庭の楽しみ方をお話したいと思います。

まず、私が所属している団体の話から始めます。そして、全国都市緑化フェアへの出展庭園、私の庭への思い、趣味についてお話しします。

日本庭園士について

日本造園組合連合会（造園連）では、「日本庭園士」という資格取得のための研修会を実施しています。

私は昨年10月に「日本庭園士補」の研修会に参加しました。「日本庭園士」になることで、ますます勉強させていただく場が得られることが期待できると思います。「日本庭園」とはなんぞやということになるのですけれども、日本の伝統に裏付けられた庭かなと漠然と思っております。

「日本庭園士」の1期生が、来年の2023 (令和5) 年に誕生する予定です。

「日本庭園士補」の研修会では実際に庭をつくって、評価を受けるのですが、その時に作業態度として、最初に土俵である作業エリアを掃き清める所作が欠如していました。

道具の置き方にしても、あちこちに置くのではなくて、スコップや突

き棒などを同一方向になるよう水糸に合わせて置くとか、それからスコップは伏せておくとか、でき上がった垣根にスコップを寄りかけないとか、そういう基本的な所作が大事だということ。あと筭板（こうがいた）をもっと有効に使わなくてはいけないよということとを改めて教わりました。普段、自分の使っている筭板は小さくてエッジが効きませんが、昔ながらの本物の道具というのはよくできているなと思いました。

今回、反省しなければならぬ点は、「日本庭園士」にならないと受講生全員が青竹を磨く基本的なことをおろそかにしてしまったことです。技能検定の悪しき手抜きの影響ですね。これが反省点です。

全国都市緑化フェア

2013 (平成25) 年に「第30回全国都市緑化とっとりフェア」が鳥取市湖山池で開催されました。

出展するにあたり、倉吉ならではの物語に則したものをモチーフにしたいと思い、打吹（うぶき）天女伝説の天女が下界に降りてくるイメージでつくりました。

タイトルは「天女降臨」。六方石に穴を開けて星を表して、橐型手水鉢を中心に放射状に小さい六方石を並べて、光輝を放つようなイメージにして、天女が降臨した瞬間を表しました。天女が庭に降りてきて上方にも光が解き放たれているような庭をつくりました。

その後の倉吉新斎場の作庭でも六方石に孔をあけて使用しました。この時の六方石の役割は、打吹天女伝説の天女が子供たちを置き去りにし

【石亀 靖プロフィール】



鳥取県倉吉市出身。軟式庭球をするために千葉大学園芸学部造園学科に入学。卒業後は生涯の恩人となる小形研三氏率いる東京庭苑に勤務。在職中、ガウディに会いたくなり1か月間休職してヨーロッパを巡る。帰国後間もなく父親が亡くなり、やむなく退職し、地元に戻り、現在に至る。(一社) 日本庭園協会鳥取県支部長、(一社) 日本造園組合連合会鳥取県中部分会長、(一社) 鳥取県日本造園建設業協会副会長、特定NPO 未来理事。



第30回全国都市緑化とっとりフェア 出展庭園「天女降臨」



倉吉新斎場庭園 「天界への帰還」



第38回全国都市緑化くまもとフェア 出展庭園「ようこそ ようこそ 鳥取県へ」



鳥取県支部の取り組み:版築土塼

て、天界に帰っていくときに子供たちが笛を吹いて、太鼓や鼓を叩いて、お母さん帰っておいでと懇願したという逸話の中のグッズで、これを篠笛と見立てて、鼓を設置して、白い帯が羽衣というようなイメージで演出をしました。斎場は最愛の方との最期の別れ場ですのでそういった哀しい物語とちょうど合うのかなと思います。「天界への帰還」というテーマとしました。

2017(平成29)年、「第33回全国都市緑化よこはまフェア」で横浜に行くことになりました。前年、2016(平成28)年4月に熊本地震

が起こり、同年10月に私の住んでいる倉吉でも震災に見舞われました。震災復興をアピールするための自治体出展。とにかく初めてそういったところに向くので、ちょっと力が入りすぎて、まとまりのないものになったのではと思っております。

みとくさんなげいれどう

鳥取県中部に三徳山投入堂がありまして、その山から水が流れていつて日本海に注ぐというイメージです。今年、2022(令和4)年に開催された「第38回全国都市緑化くまもとフェア」に出展するにあたって、横浜の経験がとても役に立ちました。くまもとフェアのコンセプトは熊

本県と鳥取県の震災復興を絡めて、それから鳥取県にコロナ後に観光に来てくださーいという観光PRのための庭でございます。

辛島公園に5m×5mの庭を設置することになりました。

今や空前のお城ブームですが、鳥取県には日本で唯一の「巻石垣」があります。この上が「天球丸」と言われる曲輪です。この「天球丸」の「巻石垣」を観光のポイントとして紹介しました。

また、山陰ジオパークには、柱状節理(六方石)が地球創造世紀の力強さを表し、鳥取砂丘と言えば風紋

が時の移ろいを思わす景色があります。

熊本フェアで手伝っていたいた方が何人かありました。その人達に「因幡の白兔」の伝説を表しているんですよと説明したら、それはどういう話ですかということ、今、若い人にはそういった伝説というのは、あまり伝わっていないことがわかりました。

「因幡の白兔」の伝説というのは、ウサギが島に渡るためにワニ(サメ)を騙して並ばせて、背中をぴよんぴよんぴよんぴよんと渡っていつて最後まで渡りきる前にワニを騙したこ

とを告白したがためにワニに丸裸にさせられたという話です。この後に大國主命と白兎が会おうことになるのですけれども、そういう鳥取の伝説を日本三大銘石の一つである佐治石を用いて表現しました。

それからもう一つ鳥取城に欠かせないのは、毛利元就と織田信長の代理戦争で、吉川経家と羽柴秀吉すなわち豊臣秀吉が鳥取城で戦ったことです。このときに、日本三大「渴え殺し」と呼ばれる極悪非道な戦いを秀吉が行ったというものを表した「武将合戦印」を設置しました。

歩道上の造園ですので、地盤を掘削することができないため、自然の六方石を使うと倒れる危険性があるので、版築でつくりました。ボイド管の中に焼き杉を入れてワイヤーメッシュで補強しました。このワイヤーメッシュがとにかく効きました。焼き杉の模様がいい感じで、色合いもついたかなと自負しています。3月4日に完成後、5月27日まで展示し、少しずつ緑が増えてきて、ネモフィラもいい感じで花が咲いてくれました。

庭への思い

私は田舎もんですので、その土地に詰まっている風景、風情、そんな

ものを、その土地ならではの庭をつくっていったらなと思っています。結局、絵画とか置物のような庭ではなくて、普段使いの実用的な庭の中にこそ、健全な美が表現されるという考え方です。

民芸の柳宗悦が唱えた「工人七原則」に則って、

どんなものをこしらえるか

どんな材料をもちうるか

どんな技術を有するか

どんな想像を示すか

どんな状態で働くか

どんな精神で作るか

この言葉を胸に入れながらこれから仕事をしていきたいなと思っています。

今の趣味は滝を訪ねること

還暦を迎えた頃から計画し、滝を巡っています。現在まで、西日本を中心に日本百滝のうち38滝を見ることができました。

私が好きな滝の一つは「赤目四十八滝」です。なぜかというところ、かの岩城亘太郎先生が滝をつくるときに参考になさったという逸話を漏れ聞いておりまして、行ってみてやはりそういうふう自然というのはいろいろな形態を見せてくれるのだなと。

岩城先生は本の中に自然の滝は人の尺度で測る以上に合理的に収まっている、自然からいかにもうるか、どう表現するかは、庭師の技量の問題だ、という言葉を残されておりまして。要は岩城先生がおっしゃる有名な言葉「人格以上の庭はできない」。まさにその通りだなと思っています。

次に好きな滝は、地元鳥取県琴浦町の千丈滝です。男滝女滝がありまして、ここに千丈のぞきというところがあって、突端まで行くことができます。地元の小学5年生が

ここに行く行事がありまして、ここから見る、秋の景色が素晴らしいです。

兵庫県養父市にある天滝、これも大変素晴らしいです。

さらに、私がこれまで見た中で一番素晴らしいのが鳥取県鳥取市の筥滝です。とても荒々しくて素晴らしい滝です。機会がありましたら、ぜひご覧ください。

まとめとして

30代はもうとにかく食べるためにどうしたらいいかというところに暗中模索しながら、一生懸命仕事をしました。40代はPTAなど子供に関わる

世界で楽しみながら自分も子供と一緒に成長をさせてもらったような気がします。50代になりますと、ある程度仕事も見えるようになりましたので、業界のためにできることをと、県内の造園関連団体の事業を楽しんでさせていただきました。

それから今60代となりまして、健康寿命72歳を自分の目標として逆算してやれることを模索しております。一つは「日本庭園士」です。とにかく、飽くなき探究心の継続を目



滝カツ「くまもとフェアにかこつけた滝巡り」

指しております。

それから、フェイスブックですが、これは私どもの年にはちょうどいいツールで、まず備忘録として活用できるし、若い人たちからの影響といえますか刺激をいただける、見ず知らずだけれどいろいろなことを教わることができるということで、これを活用していきたいと思っております。

できることがあれば、この造園の世界にいざなっていたいた恩人小形研三さんのことを伝えていく努力をしていきたいと思っております。

やって、失敗して、いけるのが若い人たちの特権だと思います。建築家は失敗を薦を這わせて隠したり、医者は土をかけて隠したりすることができすけれども、造園というのはそれを「味」として言い切つてしまえば、それに価値が発生するのだと思います。安全性の確保は別ですが、けれども、そういう何か自分の「味」というのは言い切った方がいいのかなと思います。

それから庭をつくりたいとすることあるごとに口にする、とにかくいろいろな人に会って教えを乞うこと、刺激をもらうこと。歳を取るといろいろなことを知りたくなってしまうので、若いうちに熱量の高い人に会っておくと歳を取ってから思わぬ出

会いがあったりするのではないかなと思います。

これからも私、庭馬鹿でありたいと思っております。

最後に安諸定男親方からの言葉を伝えたいと思います。「皆さん、庭にもつと熱中症になってください。とにかく今道具を使うことの勉強を増やさないよ。若い人に、道具の使い方をどんどん伝授する努力をなさいよ」と最近盛んにおっしゃいます。私はあまり、道具の使い方が上手ではありませんので、上手な方を紹介し、研修の場をつくらせていただくことができるかと思っております。そういうことをこれから頑張っていきたいと思っております。

今回のお話は私のフェイスブックをまとめたものです。もし、興味を持っていただけたらフェイスブックを覗いてください。

また、くまもとフェア打合せの帰路、佐賀県の「観音の滝」に行く機会を得ました。まさに小形さんの生誕の地・唐津市七山におわす百滝でした。滝カッを始めたおかげの聖地巡礼。なんだか導かれていいるような不思議を体験しました。

(鳥取県支部長・正会員)

(写真は全て石亀靖氏提供)



I 邸庭園(石亀 靖氏作庭)



桜山大日寺庭園(石亀 靖氏作庭)

石亀講師の講座を受講して

わたなべ まなぶ
渡辺 学

1976年生まれ、神奈川県出身。主な仕事は庭園管理、伐採、剪定を得意とする。



石亀靖講師は、

「東京庭苑」で修業され、その後もいろいろな経験をされ、勉強されている方だとわかりました。私ももっと勉強しなければと思いました。

石亀講師の作庭に関係するヒントや庭に対する思い、物語を勉強させていただきました。さらに作庭の作業の工夫に驚きました。その工夫や考え方は修業されていた「東京庭苑」で修得した技であったり、石亀講師の経験がアイデアとなっているのだろうと思いました。私はまだまだ経験、知識共に足りませんが、それらを深め、今後の庭づくりに取り入れていきたいと思えます。

今回、「日本庭園士」という資格があることを知り、いつになるかわかりませんが、これから勉強して資格を取得しようと思えました。そのためには、日本庭園協会の連続講座にできるだけ参加して技術と知識を深めていきたいと思えます。(正会員)

庭に向かう私の姿勢

第6回 『ドバイに続く5つの目標』

なかさ しゅうじ
仲佐 修二

2022（令和4）年9月22日（日） オンライン講座

はじめに

本日は講師というより、私が日頃考えている「庭に向かう姿勢」をお話しさせていただきます。その中で庭師仲佐修二はどんなやつかと分かっていただければ幸いです。

最初に自分が体験したことを話します。次に地元島根県の庭園と私が手掛けた庭の紹介をします。

自身の体験で思うこと

39歳の時に、初めて県外に出て、いろんな庭師さんと出会いました。



【仲佐修二プロフィール】

1977年、島根県安来市生まれ。松江市の工業高校、大阪の大学卒業。高校、

大学を通して土木工学を学ぶ。卒業後、地元の土木関係のコンサル会社に入社したが、思うところがあり5カ月で退社。松江市の造園会社にて3年半修業後、実家に帰り家業に就く。30歳で代を継ぎ、現在に至る。活動名を「庭のとき」とし、県内外や海外・ベトナムなどで作庭を行っている。

いっそ海外に出よう

なぜ39歳だったかというのと、その頃に地元の旅館でとても大きな仕事があつて、それがきっかけで初めて県外に出ました。それまでは島根県安来市という小さな町で剪定中心の仕事をしていて、そこで天狗になっていましたが、初めて県外に出たときに鼻をへし折られました。日本中のはとてつもないすごい庭師さんがいるんだということが分かり、このままでは駄目だと思いました。そのときから自分の考え方を改めて、自分がどんな庭師になりたいのか、どんなものをつくりたいのかなどをすくく考えました。その時に「よし県外にでてみよう」と思いました。

いざ県外に出てみると、もうすごい庭師さんばかりで、これはなかなかかなわないぞと思いました。では全国はどうかと考えたときに、全国では何十倍何百倍もすごい庭師さんがたくさんいて、ここで勝負できるのかなと思いました。

それならばいっそ海外に出てしま

えと思っていましたら、今から4、5年ぐらい前のことです。突然ベトナムの方からSNSでメッセージが届きました。「お前は庭がつけれるか」といった内容で、「誰に聞いているの」、「つくれるよ」とメッセージのやりとりをしていたら、「一度来てくれ」と言われました。「では行きます」と飛び出したのが海外での作庭のきっかけとなりました。

誰も頼る人もなく一人で行き、ベトナムのメール相手と出会いました。話だけのつもりでしたが「すぐ庭をつくらしてほしい」と言われました。「いや、話にただだけです」と返したら「じゃあ一度帰ってまたすぐ来てくれ」ということに。それも面倒だなと思って、「ではつくって帰ります」と腹をくくりました。

作庭依頼は5m×6mぐらいのスペースのマンションのエントランスの庭でした。渡航は1週間の予定でしたが、そのうち、実質4日間ぐらいで何とかつくりました。その時の依頼者から今後も協力してほしいと望まれ、ベトナムでのパートナーとして今に至っています。

初めて海外に出たとき、一つ夢が叶いました。その時どう思ったかと言いますと、出るのはすごく簡単だったなということです。そして今後

どうしようかと考えた時、もつと日本国内でつくりたくないといけないと思いい、もつと県外で庭をつくりたいという目標ができました。

夢を叶える5つの目標

自分どんな庭をつくらうかと思つたときにまず大きな一つの目標を決めます。僕の大きな目標はドバイでつくりたいということです。どんなに小さな形でもいいから自分の力でドバイで庭をつくらうと思つています。ドバイで庭をつくるにはどうすればいいのか。そこで私は5つの目標を立てました。

例えば「庭の雑誌に載りたい」とか、「建築の設計士さんから仕事をもりたい」とかという目標です。

目標は過去形で書きました。「庭の雑誌に載った」、「設計士さんから仕事をいただいた」というように、1年間の初めに手帳に書きます。すると、1年経って振り返ったとき、必ず1つか2つはかかっています。

「日本の雑誌に載った」と書いたら半年で取材があり、「海外で庭をつくら」と書いたら、それも半年ぐらいで話が来ました。そういう繰り返しで39歳から初めて46歳の今日までの6年間ですごく変わりました。

目標が叶ったとき、もう一人の自

分がどう思うかがとても重要です。

「海外で庭をつくった」という目標がなかった時は、東京で庭をつくってないことに気づき、「次は東京で庭をつくらう」という目標に入れ替わります。すると常に5つの目標があることになりました。

なぜ目標を5つにするかというと、「ドバイで庭をつくりたい」というのは、一生かなわないかもしれません。しかし5つの目標があると1年の間に1つか2つは必ず叶います。ドバイまでどんどん近づいていきます。常にある5つの目標のうち1個がなかなか叶わなくても5つあれば、目標が叶う喜びを味わえるのです。その喜びがどんどん大きくなり、次はこれを叶えようというようになっていきます。今思えば、39歳のときの自分と、それをやってなかった自分を比べると、多分天と地の差があると思います。

それを皆さんにやってくださいとは言わないですが、何か考え方をちよつと変えるだけで、一年の成長のスピードがすぐ変わるんじゃないかというのを自分は経験したことでわかりました。何か感じてもらえればと思います、体験をお話させていただきましました。

島根県の庭園紹介

島根県の庭園を紹介する前に、私なりの「庭園の見方」をお話します。まず、その空間の構成と骨格をよく見ます。細部にいたっては大きさのバランスです。変わらないものに対して変わるものと、それが変わっていくものを管理するというもので庭がつくられていくんだと思いますので、現在残っている古いお庭だったり、名庭だったりを見に行くという部分を見えています。そういう構成や骨格の良い庭がずっと残っているのではないかと思います。

私の家から歩いて15分ほどのところに「足立美術館」があります。足立美術館の庭園はアメリカの雑誌(註)で16年連続1位に選ばれたことで有名です。これは庭園の規模や知名度だけではなく純粋に美しさなどいろいろな要素を評価されて1位に選ばれています。いつ行っても美しく掃除もされていて、館内で働いてる方々のサービスなども全部含めた上での評価のようです。

2021年のランキングで島根県は「足立美術館」を含めて、50位以内に5つの庭園がランクインしています。1位「足立美術館」、4位「皆美館」、20位「由志園」、27位「長楽

園」、28位「康国寺」です。この他、島根県には禅僧雪舟作と伝わる「小川家雪舟庭園」、「医光寺」と「萬福寺」の庭園があります。

この様に島根県では世界的に有名な庭園、歴史のある庭園、出雲地方の特色のある庭園など数多くあります。機会がありましたら是非一度訪れてみてください。

註 米国の日本庭園専門誌『ジャーナル・オブ・ジャパニーズ・ガーデニング』

仲佐講師の講座を受講して

渡辺 学

仲佐修二講師は歳が近いので拝聴して刺激を受けました。海外で多忙な日々を送り、有名な老舗旅館などの作庭に励まれている様子から、ドバイでも活躍されるのだらうと思いました。

足立美術館の庭園が仲佐講師自身の作庭の源と感じました。私なりに思ったのは、名園が近くにあるという環境によって作庭のアイデアが浮かぶのだらうということです。もち



さぎの湯荘別邸・枯れ流れ (仲佐修二氏作庭)

ろん、人の何十倍も努力をされていると思いました。

海外の作庭ではアクセシビリティに見舞われると思いますが、楽しく乗り越えられる人であらうし、その行動力は見習いたいです。

島根県の庭園紹介では、出雲式庭園を知ることができました。足立美術館や由志園は紅葉の時期に、さぎの湯荘別邸庭園にも訪れてみたいです。ベトナムホテルもいつか旅行で宿泊したいです。

目標を過去形で書いて実現させたというリアリティある話は刺激を受け、体に電気が走りました。ユーチューブの映像も旅館の作庭作業の場面も手際がよいと感じました。(正会員)



⑤パートナーの事務所の庭(ベトナム)

今年つくったパートナーの事務所の庭です。6m×6mぐらいの中庭です。骨格の部分となる石は、日本庭園というか日本人の感覚で配置しています。そこに現地の植栽をミックスするというつくり方をしています。使っている石は全て木化石（ほっか石）です。とても高価な石ですが、流れの部分は砕いてつかっています。尊敬する京都の庭師さんが一緒につくってくれました。



⑥一般住宅の庭(ベトナム)

一般住宅です。日本と似ていますがすごく狭いです。建物を敷地いっぱい建てて、庭のスペースは狭いのですが、ここは庭の外にもつくって欲しいということで、ちょっとステップ的な石組でつくりました。

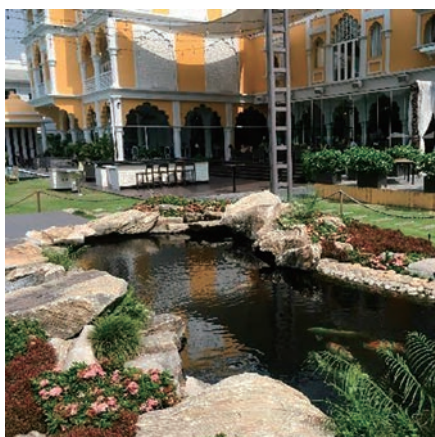


③A邸(倉吉市)

こちらも古民家のプロジェクトに関わる庭です。それまでの庭の骨格は残しつつ、大きい樹木などはそのままにして改修しました。

写真の建物は蔵で、その前に主屋があります。蔵と主屋の間に庭をつくりました。

門を入ったところから母屋の玄関に向かうアプローチをやり直しました。



④ホテルクロエ(ベトナム)

このホテルの庭は、4年くらい前に3週間で作りました。1日10人ぐらいの現地スタッフを左官と造園の2チームに分けて作業しました。日本からは地元の先輩も来てもらいました。

ベトナムで庭づくりをする場合の制約として最初にプールができ上がっていることが多いです。石で躯体のコンクリートを隠してほしいというようなつくり方なのです。こちらが思うようになかなかありませんが、そのような条件の中でベストを尽くしています。背景はホテルの建物です。ベトナムはフランスの植民地だったためフランス文化の影響で建物はフランス様式です。それと庭を融合させるのがとても難しいところです。日本人の感覚の石組ですが、ベトナムの方はすごく花などカラフルなものが好きで、それをミックスしてほしいという注文でした。石組と植物のカラーをうまく合わせています。完成後は若干色が落ち着いてきています。



①U邸(安来市)

足立美術館から5分ぐらいのところにあるお宅です。施主は盆栽を趣味にされていて、以前私の父がつくった盆栽を飾るための庭を私が改修しました。

猿棒（盆栽台）に飾られた盆栽を歩きながら鑑賞する庭です。そのアプローチと猿棒の配置を見直しました。以前は四つ目垣の右側だけの狭い空間に凝縮されていたのですが左側にも展示スペースを増やしました。猿棒の足元にはコケを貼っています。

ここで一番良い盆栽は、樹齢何百年かの真柏です。有名な長野県小布施の鈴木真司という盆栽師から買われた盆栽です。

この水鉢は岡山の石を自分で穴を彫ってつくりました。



②さぎの湯荘別邸「鷺泉」(安来市)

足立美術館から約50mのところにある古民家を移築し改装した旅館です。この庭は私が39歳ときに初めてつくりました。それまで1人で庭をつくったことがなかったので、ここの仕事が自分のターニングポイントとなった庭です。

アプローチの奥が蔵を利用した宿泊施設になっています。田舎らしく素朴ですが「上質な旅館」というのをテーマとしています。樹木はアカマツの他ソヨゴ、アオダモ、ミツバツツジなど紅葉するものを多く植えています。全て山から掘ってきました。

露天風呂の庭も2つつくりました。隣り合わせの庭を真ん中で仕切らず繋がって見えるような庭にしています。それぞれの露天風呂から眺めると、隣の庭も続いて見えるようになっています。砂利は荒島の赤砂と富士砂を使って赤と黒でトーンを変えています。

清澄庭園鑑賞会の報告

きくち まさき
菊地 正樹

1 開催までの経緯



鑑賞研究委員会

の活動は2020
(令和2)年1月16
日、日本で最初の

新型コロナウイルス感染者第1号が
確認されて以来のコロナ禍により、
活動を自粛せざるを得ない状況とな
りました。当協会は「会員一人でも
新型コロナウイルス感染症に罹らな
い」という大命題の下で定期総会も
対面での開催が中止となりました。

春と秋に行われていた鑑賞会は庭園
鑑賞を主とする対面で行うものであ
り、自粛せざるを得ない状況でし
た。この状況は2021(令和3)
年も同様でした。2022(令和4)
年の総会はオンラインを導入したも
のの対面開催は見送られました。し
かし、当協会の組織方針には「新型
コロナウイルスの感染拡大に十分配
慮して安全を第一として事業実施す
る」として一般市民に向けた鑑賞会
を年2回実施するという方針が了承
されました。

③庭を「見る、知る、楽しむ」をテ
ーマとする。

3 実施内容

人数制限を行い、参加者を20名に
限定し、当日はマスク着用、こまめ
な消毒と体調の悪い方は参加を認め
ないなどコロナ対策をしっかりと行う
ことにしました。

開催場所については全国から集ま
りやすい場所として東京都区内と
し、1923(大正12)年に創立5
周年記念庭園観賞談話会を実施し、
95周年記念事業も実施した都立清澄
庭園とし、メイン会場は清澄庭園涼
亭としました。涼亭は池面にせり出
して建てられているので風が通りや
すく換気は万全であり、しかも日ご
ろは使用できない建物です。また、
今回の参加者は20名であり、涼亭利
用者数上限は50名なので密を避ける
ことができました。

具体的な内容は①清澄庭園を知る
企画として龍居竹之介名誉会長に
「清澄庭園く明治の庭のおいたち」と
題して、岩崎家3代(彌太郎、彌之
助、久彌)にわたる「深川親睦園」
としての明治時代の近代的庭園の成
立について、また関東大震災の被害
及び岩崎久彌と東京市公園課長井下
清との庭園寄付の経緯、東京大空襲



池にせり出す涼亭の佇まい 高橋康夫氏撮影

における清澄庭園の活用などを説明
していただくとともに、清澄庭園の
文化財としての価値や特徴などを実
体験を踏まえて講演をしていただく
(次号庭園ニュースで詳細掲載予
定)。②庭園を見る企画として清澄
庭園に長く勤務して庭園維持管理に
携わった北村均理事に庭園を案内し
てもらい、通常のガイドでは聞けな
い実務の話をしていただき、庭園協
会ならではの庭園ガイドを行う③楽
しむ企画として涼亭は煎茶点前の環
境に相応しい場所であり、2021
(令和3)年10月31日(日)に開催さ
れた第12回連続基礎講座第1回目
「煎茶精神と庭くそのかわりをさぐ
る」の講師を務めた加藤精一常務
理事に煎茶点前をお願いすることと

し、当日は加藤精一氏による煎茶点前（茶櫃点前、後見・専心小笠原流得本峨王先生）を披露していただく。

また庭園を楽しむための大きな要素である昼食については日本橋今半のお弁当を味わってもらうことにしました。

4 実施結果と今後の活動

当日は風もなく穏やかな鑑賞会日和となりました。師走のあわただしさを忘れて清澄庭園を十分「見る・知る・楽しむ」を味わっていただけたと企画者としてホッとしたところ です。

2023（令和5）年度は日本庭園協会が105周年を迎え、その記念事業の一環として「清澄庭園を国指定名勝にする」という活動をしています。そのキックオフとなればという意図を含んでの会場設定でしたので、来年度の事業に向けて弾みがつけば今回の鑑賞会の目的が達成できたものと思う次第です。

今回はあまり知られていなかった加藤常務理事の煎茶点前の技量や北村理事の清澄庭園の知識や経験を生かすことで一味違う庭園協会独自の鑑賞会が実現できました。今後も庭園協会の会員が持っている知られざる能力を発揮できるような企画を考

えたいと思っています。

2023（令和5）年度の鑑賞研究委員会の事業は、創立105周年事業として当協会ゆかりの庭園における鑑賞会を実施する予定ですが、新型コロナウイルスの感染が収まり、会員の皆様と対面でお会いできることを切に願っています。

（鑑賞研究委員長・副会長）

煎茶点前披露



加藤精一

1962年生まれ。2002年、独立。右も左もわからないまま模索しながら仕事を継続。2006年、法人化。社員と共に仕事を発展させようという思いで、たがーディングショーで庭園協会と知り合う。勧められて2009年に入会。勉強ができる会に入会でき、感謝。煎茶も勉強のため、2011年より始め現在に至る。

「清澄庭園鑑賞会」で、清澄庭園涼亭にて、煎茶点前の披露を行うことになりました。

お点前披露の準備として、涼亭内部を事前に確認いたしました。お煎茶は、炉を使用しないため、様々な場所でお点前を行うことができました。そうとは言い、どのように準備をすればいいか、外からは眺めていたのですが、中に入ったことがなく、室内が畳敷になっていて、少し驚きましたが、まずは、お客様にどのよ



加藤精一氏のお点前を拝見する参加者 中澤正幸氏撮影

うに席に着いていただくか、検討いたしました。座敷用の大きなテーブルと、低い椅子が設備にありましたので、これを使用して、立礼席（椅子席）にすることとしました。また、水屋としては、併設されていた給湯室を利用することにしました。古い建物では、火気厳禁のところが多く、電熱器を使用しようと考えておりましたが、この涼亭の室内にはコンセントがなく、給湯室でお湯を沸かし用意することになりました。最近、炭を使って湯を沸かすことができないところが多くなり、その都度確認が必要と思います。炭やお香の香りが無いと、とても残念でなりません。

次に、お点前はシンプルがよいのではと考え、茶櫃点前にいたしました。このお点前は茶櫃の蓋を、お盆の代わりに使用する親しみやすいものです。参加の方々にも、見やすいと考えました。そして、これに合うお茶碗選びは、12月と寒くなる時期ですので、当初は陶器のお茶碗が冷めにくいから良いかと思いましたが、やはり、お煎茶らしい磁器の茶碗といたしました。茶櫃ですので、少々小ぶりの急須類にし、これらに合う道具類を揃えました。私の師匠である得本峨王先生に相談しながら、すべて、お道具をお借りいたしました。立礼席に合わせ、お点前席のテーブルや椅子もお借りし、用意いたしました。



煎茶点前を披露する加藤精一氏と、童子の加藤峨貴氏、後見の得本峨王先生 中澤正幸氏撮影

れ、龍居竹之介名誉会長の講演の前までに、準備を進めました。昼食後に、その場で席を整え、何とかお点前をご披露することとなりました。

お客様は清澄庭園の冬景色が見えるよう座っていただき、正客席は龍居名誉会長に、残りの4席には参加者の方に着いていただきました。お点前披露ということで、皆さんにすぐ傍で熱心に見ていただくこととなり、これまでに経験のない緊張感の中、意識を失いそうになりながら、お点前をさせていただきました。まだまだ、修業が足りないと感じていました。お点前の後、龍居名誉会長に、お茶の味はどうでしたかと恐る恐る伺ったところ、うまかったとおっしゃっていただき感無量でした。

お煎茶といつても、今回の茶葉は玉露です。大変おいしい茶葉ですが、湯の温度、量、蒸らし加減で味が変わってしまいます。この一煎に、おいしいお茶を入れることに、専念いたしました。

最後に、江戸中期、煎茶を広めた売茶翁は、景観の良いところを選び、茶店を営みました。これからもお煎茶と庭の鑑賞との縁をよりお伝えできたなと思いました。

(総務委員長・常務理事)



庭園案内する北村氏 中澤正幸氏撮影

庭園散策：清澄の魅力伝える

きたむら ひとし
北村均



1961年生まれ、長野県上田市出身。東京都建設局で小石川後樂園・浜離宮恩賜庭園・旧古河庭園・清澄庭園の維持管理に携わる。座右の銘：その時はその時です。その時もその時です。

清澄庭園ではガイドボランティアの皆さんが歴史と四季折々のエピソードを交え魅力を発信していますので、私は今まで清澄庭園で維持管理に関わってきたことをメインに皆さんの魅力を発信できればと思います。と園内を散策しました。

○土橋の話

2011(平成23)年3月11日の震災で被害にあった土橋を2015(平成27)年に改修しました。1928(昭和3)年頃の写真を根拠に4



見学の様子 酒井和佳子氏撮影

本橋脚だったものを2本橋脚に復旧しました。ベニアに原寸大で橋のラインを描き、現場に立てて橋の高さと収まりの良さを確認しました。木材は岩手の南部赤松を使用し、現地で材料の原寸の型紙を当てて桁の曲がり具合と赤身のところで材料取りができることを確認しました。しっかりと赤身のところで木取りができていることを近くで見てもうえました。

○層塔の話

震災被害にあった層塔の調査を当協会・東京都支部が行いました。調査の過程で笠の辺長をグラフにした時、十層と十一層の変化が不自然だったので、この間に仮に2層入れると自然なカーブになることからこの塔は十三重層塔と推測しました。また、基壇に「十四年巳年」と刻まれ



現在の燈籠と棗型手水鉢 北村均氏提供

ていて歴史を遡ると天文(室町時代)・元禄(江戸時代)・明治(近代)の三つの時代が当てはまり、製作時に刻まれたものと考えたと石材の風化具合、笠の様式から見て1545(天文14)年巳年と推測されることを参加者に話したところ、「14年巳年は三つしか当てはまらないのか」という反応と共に層塔のことにも興味を持ってもらえました。

○古写真の話

清澄庭園には多くの写真が残っています。昔と今が対比できる一つの例として灯籠と棗型手水鉢のある場所を案内しました。日本館があった当時の写真を示し、灯籠と棗型手水鉢の関係を見てもうえました。併せて昔のまま変わらない風景も見てもうえました。



池を挟んで左手前の涼亭と対岸の大正館 北村均氏提供

註1…1907（明治40）年に建てられ、
1985（昭和60）年に改築された
註2…1989（平成元）年に改築

清澄庭園の管理に関わる中で感じていたお庭と建物の関係は、日本館が焼失したことで当時の視点を示すことができないでいました。しかし、現在の涼亭（註1）は池を取り込んだ風景になっていて、対岸には日本館に代わる大正記念館（註2）があり、それぞれ池を挟んで建物と池が一体となった風景を見せています。

（理事）

庭の魅力再発見



田中 宏明
2001年生まれ。山梨県甲府市出身。甲府第一高校卒、現在、東京農業大学造園科学科3年生。趣味…旅行、追っ。印象的な庭…妙善寺（山梨）、本光寺庭園（京都）、不二迎賓館。尊敬する人…藤原新也、中沢新一、宮台真司、ロバート・ハリス。

今回の清澄庭園鑑賞会では、清澄庭園に対する見方や魅力を知ることができただけでなく、これから私が庭を見るときの鑑賞の仕方とも学ぶことができました。

私が初めて清澄庭園を見学したのは2年前の大学入学直後のことでした。当時は取って庭の前情報無しに庭園を見学していたためにその庭に対する視覚的・感覚的な視座でしか見ていませんでした。もちろんその後案内板やパンフレットを読んで史的な補助をしてまた巡るわけですが、その時の視覚的な印象としては、沢山の庭石が丁寧に展示されているということでした。浅学な私の目にはごく普通の回遊式の大庭園のように見えていました。

そんな私が清澄庭園の魅力を深く知り愛着を持てたのは、今回の鑑賞会のお陰です。庭園内にある涼亭で庭を背景にしながら龍居竹之助名誉会長から清澄庭園の歴史と庭の特異

な点をご教授いただき、美味しいお昼ご飯を食べました。会員の加藤精一氏と同門の方による情趣溢れる煎茶席があり、最後には清澄庭園で長年お仕事をされていた北村均様から庭の修景物やその背景を昔の写真と共に歩いて解説をしていただきました。

京都と東京の庭園は歴史・地理・社会的に異なります。東京は江戸時代に代わって、京都よりも広い敷地に庭を造成し維持活用していくこと。大名が材料も地割も頭を捻って考えて趣向を凝らして完成した大名庭園があったということ。そしてその上で明治期にこの清澄庭園が江戸の下屋敷をもとに岩崎彌太郎が、商売上関係のある船を用いて全国から種々の石を集め庭園の基礎となる深川親睦園をつくり、その後弟の彌之助が和館・洋館を全体の空間構成としてまとめ上げたということでした。

この内容の段階で既に清澄庭園の印象に色がつき始めたわけですが、話を聞いて一番感動した点は清澄庭園の当初から持つ公共性でした。親睦園として人を招き、関東大震災時には一万人以上もの多くの一般人の命を救ったことであり、寄付後の清澄庭園も戦災時には避難場所となったのです。三菱財閥から東京市に寄贈する際には、隣接する土地を含め

て渡すことにより庭の恒久的な維持活用まで考えていたということに、清澄庭園の重大な意義を感じました。現在の公園としての機能も持っている素晴らしい庭園です。

日々の大学での座学とは異なり、清澄庭園内の涼亭において庭を背景として実際にその空間を使用しながら学び、文化を体験できたことも鑑賞会の良いところでした。そんな実物を目の前にした空気感と共に知識やその時代背景が入ることでこんなにも庭園の見え方が変わり、魅力的に見えるのかと実感しました。杵としては大名庭園・雑木の庭などの分類があるにしても、一つ一つの庭としては必ずその庭を定義する魅力的な点があり、それを読み解いていくことが一段と楽しになりました。

（会友）



大正記念館側から望む涼亭 高橋康夫氏撮影

追悼 大平 暁 氏

大平 暁さん安らかに

たついのすけ
龍居 竹之介



大平 暁さん、私はいまだにあなたと永いお別れをしたことが信じられず

にいます。同世代の戦中派で話が合ったこと、日本庭園協会だけでなく戦後再発足した日本造園士会最後のメンバーの一人として金子直作さんなどと、また独特の活動をされていたあなたの姿は、私にとってとても新鮮であり、うらやましい活力の持主であったからです。

ご縁戚にあたる和田貞次さんがたちあげられた箱根植木から庭世界の第一歩を踏み出されたことは、人脈豊かだった和田さんを通じて上原敬二先生を知り、現場仕事では斉藤勝雄さんに師事できるという好運に恵まれ、生来の勉強家だった大平さん



故 大平 暁 氏
令和4年11月7日ご逝去

はぐんぐん力をつけられました。

そして活躍の場はやがて海外にまで及び、日本の庭の魅力まで漂い出した感じでした。しかもお仕事について伺ういつも丁寧な気分うところもなく、実的確に教えて下さいましたね。こうして日頃の海外事業のご体験を常にお聞かせ下さったことが、以前から私が夢見ていた日本庭園協会による国際日本庭園シンポジウムの開催という大それた計画の背中を押す力となったのです。もちろん事業は新たに編成した実行委員会の奮闘で見事な成果を生んだのですが、その前にまず大平さんによる情報の力が開催に踏み切る一因となっていました。

思えば大平さんには私は随分助けていただきました。日本庭園協会の副会長としては運営に細やかな知見をいただいたお蔭で、大過なく事業が進められたことでありました。

また大のカメラ好きでいらっしやったことでは記録写真を多く残して下さったり、広報委員長としては協会報の充実に尽くされました。

いま目をつぶるとご一緒した海外

の空港で奥様と仲むつまじくお土産をあれこれ選んでおられるようすがはつきり浮かんできます。

大平 暁さん、どうか安らかにお休みを。長いこと私をお導き下さって感謝感謝です。
(名誉会長)

大平 暁氏をしのぶ

箱根植木株式会社
代表取締役社長 和田 新也



大平 暁氏は1954(昭和29)年に信州大学繊維学部を卒業後、1956

(昭和31)年に創業者である私の父、和田貞次と縁戚関係であったこともあり、設立間もない箱根植木株式会社に入社されました。

当時は自宅と事務所が近接していたため、大平氏はよく我々家族と共に食事をしておりました。

大平氏は非常に勉強家でよく本を読み、また現地へ足を運び、写真をたくさん撮り、それらをしっかりと整理して保管していました。本来造園専攻ではなかったのですが、斉藤勝雄先生や吉村巖先生の指導の下、持ち前の勤勉さと粘り強さで、造園工事の設計・施工の技術を磨き、長い間箱根植木の技術系の長として活躍されました。就業当初は革靴で材料



米国カリフォルニア 左:斉藤勝雄先生、中央:施主、右:大平氏。
出典:斉藤勝雄作庭技法集 第4巻 河出書房新社 1969

を見に行き、生産者に相手にしてもらえなかったというような苦労話もされていきました。

大平氏の功績は国内もさることながら、何ととっても海外の日本庭園の工事を数多く手掛けたことです。1969(昭和44)年に斉藤先生の力でアメリカ合衆国において3件の日本庭園を施工したのを皮切りに、1972(昭和47)年にはやはり斉藤先生と共にスイスジュネーブWHO本部の日本庭園プロジェクトの施工、その後1980年代にはほぼ毎年のように海外プロジェクトを手掛けてきました。

大平氏と共にした私の思い出深いプロジェクトのひとつは、1983（昭和58）年に施工したスイスジュネーブにおける日本庭園です。この庭園は日本通のスイス人社長が自社本社ビルに日本庭園をつくりたいということでスタートし、大平氏中心に当社で設計・施工を行ったものでした。大平氏と私は現地で施主の社長と打ち合わせる中で、当初の希望工期に間に合わない可能性がある旨を伝えたところ、驚きの答えが返ってきました。「問題ありません。画家は毎日絵を描き続けるわけじゃない。どうしても気が向かない時も有るだろうから、そんな時には無理に作庭作業をせず、休んでいてくれていいですよ」。



英国リパブル園芸博覧会日本庭園にてエリザベス女王陛下に握手していただく大平氏 1984

国内では日々ゼネコンに煽られ、設備や外構工事の人たちと陣取り合戦をしている身には、予想もしない施主の言葉に、大平氏も私も感激したのをよく覚えています。このプロジェクトに限らず、海外での日本庭園の造園家に対する評価は国内におけるそれよりもはるかに高いことが多く、大平氏が積極的に海外プロジェクトにかかわってきたのも、自分たちの仕事を高く評価してもらえという、技術者の根本的な喜びがそこにあったからかもしれません。

やってきてしまったお別れの日

しばた まさひみ
柴田 正文



初めて大平さんと出会ったのは新宿にあった「談話室滝沢」という喫茶店でした。翌月に日本で開かれる第2回国際日本庭園シンポジウムの打合わせをしていた1998（平成10）年5月7日のことです。

その近くのテンプルで龍居竹之介氏と額を突き合わせて相談していた方は、きちっとスーツを着込み、スラリとしたロングヘアのインテリに見えました。その人こそが箱根植木（株）の大番頭の大平曉さんでした。シンポジウムという大事業を無事

終えた後の10月に広報委員会が発足し、大平さんは広報委員長に就任し庭園協会ニュースなどの発刊を龍居竹之介編集長から職務を引き継ぎました。あの喫茶店での密談はこのことだったのかと一人合点しました。

大平委員長の下、8名体制で広報活動がスタートし、庭園協会ニュースは31〜66号、機関誌「庭園」は復刊7〜9号まで取材依頼からレイアウト、原稿校正、印刷出しまで力を合わせて続けてきました。B5版だった協会ニュースをA4版へと見やすくし、機関誌「庭園」復刊8号で1919（大正8）年に発行された創刊号の復刻版の発行などは特に心に残りました。

箱根植木の太平さんといえば海外に日本庭園を数多くつくってきたことで有名です。特に1984（昭和59）年に英国リパブルで開催された国際庭園博覧会に日本政府が出展した日本庭園は設計と施工を任せられ、総合部門、永久保存庭園部門で「最高名誉賞」に輝き、「審査員団最高金賞」、「ラージ・ゴールドメダル賞」も獲得し、エリザベス女王陛下の日本庭園への来訪を得るという大変な名誉なことだったとお聞きしました。

常に穏やかで、どこに海外に飛び出し材料の調達や施工の段取りまで

するパワーが隠されているのか不思議でなりません。そのような実績を評価され、2003（平成15）年に（社）日本公園緑地協会から第11回佐藤国際交流賞を授与されました。2012（平成24）年に協会副会長に就任され、協会全般を見ていただくことになり、広報委員長は私が継がせていただくことになりました。2016（平成28）年に名誉会員になられたからは中々お目にかかる機会もなく、気にしていた折のご逝去の訃報でした。ここに日本庭園協会の発展に貢献された氏のご冥福を心からお祈り申し上げます。どうぞ安らかに眠りください。

（前広報委員長・名誉会員）



鑑賞会春季見学会 清見寺にて 2013.5.16

本部・支部たより

全国支部長連絡協議会 報告

2023（令和5）年1月28日（土）

近畿支部長 山田 拓広^{やまだ たくひろ}

全国支部長連絡協議会が、2023

（令和5）年1月28

日（土）14時より、



オンライン形式により開催されました。出席者は、全国支部長12名、本部から高橋康夫会長、内田均副会長、廣瀬慶寛技術委員長、他5名の合計20名でした。

会議では今回担当の近畿支部山田支部長の司会により、各支部での活動状況、近況について報告されました。コロナの状況下であまり活動できていない支部もありましたが、春以降の状況緩和を見据え、各々の活動計画も報告され、今後の各支部の活動の参考になったのではないでしょう。

例年会議とともに行われていた見学会については、今年は状況緩和後の5月13日（土）、14日（日）に京都にて開催予定、詳細は後日案内とのことで報告されました。

SNSの開設について

105周年を迎え、一般の方にもよく当協会を知っていただく機会を

増やすべく、新たにSNSアカウントを開設しました。フォロー・拡散など、ぜひご協力をお願いいたします。

技術委員会

「みんなの緑学」申込受付中

◎長尾欽弥とよね・庭園と美術品

～秘められた長尾家の遺産～

講師…加藤 映氏

日時…4月27日（木）

13時30分～15時30分

◎浅草寺・伝法院庭園における修復

工事について

講師…藤元裕二氏（浅草寺学芸員）

日時…6月6日（火）

13時30分～15時30分

——（次項共通）——

場所…日比谷公園内

緑と水の市民カレッジ

申込…日本庭園協会事務局

e-mail: gsj20@m7.dion.ne.jp

FAX…03（3204）0595

定員…先着30名

受講料…2000円（資料代込）

鑑賞研究委員会

105周年記念事業・清澄庭園講演会

①「井下清らの技術者集団がつくり

上げた公共の日本庭園としての清澄

庭園の文化的・技術的価値」

講師…高橋康夫会長

②「清澄庭園の現状と今後の課題」

管理者から見た清澄庭園」

講師…中山なつ希氏（東京都公園協会文化財庭園課課長）

日時…7月9日（日）

13時から16時10分

場所…清澄庭園・大正記念館

申込…日本庭園協会事務局

e-mail: gsj20@m7.dion.ne.jp

FAX…03（3204）0595

定員…先着50名

参加費…3000円（資料代込）

申込締切は、6月30日（金）

国際活動委員会

4月25日（火）、オーストラリア大使館において、当協会は「オーストラリアガーデン評議会（AGC）」との協定覚書を交わします。今後更なる国際活動が活発に行われることが期待されます。

そこで、協会の皆様に国際活動に興味のある方や、活動に参加意欲のある方、また、海外からの研修生を受け入れてもらえる方を募集したいと考えています。

改めてアンケート調査を実施しますので、ご検討いただければ幸いです。

新入会員・氏名（住所）

（2023（令和5）年1月1日から3月31日入会

福家満也（徳島県）、栗原裕也（東京

都）、上口慎一郎（石川県）、小賀武

（石川県）、小村尚志（石川県）、田畑

智日（石川県）、中西喜昭（石川県）、山口貴司（石川県）、木村俊三（オーストラリア）（入会順・敬称略）

編集後記

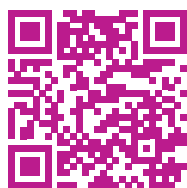
★巻頭言：小形研三さんが使っていた言葉。「てんとう虫」は、おてんとうさまの回る方向に、つまり時計まわりに、「あべに廻せ」は、その反対（あべこべ）に廻せという意味。小形さんの師飯田十基さんもよく使っていたと聞きました。「わざ」と共に「用語」も伝わっています。（う）

★小形研三氏作庭・西野邸で使われた青石は、秩父・小川町産の下里石。庭に青色を取り入れるセンスに脱帽。（う）

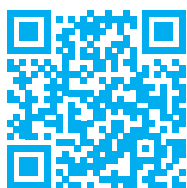
★本号の編集校正は、高橋康夫、内田均、小沼康子が担当しました。

編集担当…小沼康子／内田均／中山なつ希
／酒井和佳子
本文デザイン…由比まゆみ

SNSのフォロー（購読）をお願いします



Instagram
インスタグラム



Twitter
ツイッター